研究紀要　第1集

遊びが子どもたちの未来をつくる

子どもの主体性からの育ちをつなげる就学前教育・保育の展開

令和５年度

Ⅳ　実践研修　公開保育（研究）・実践検討会

四日市市幼児教育センター

目次

Ⅰ 研究主題について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
1 四日市市幼児教育センター設立意義より・・・・・・・・・・ 2
Ⅱ 今年度の研究について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
1 研究の目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
2 研究の着眼点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
Ⅲ 研究の方法について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
1 研究の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
Ⅳ 実践研修〔公開保育（研究）・実践検討会〕・・・・・・・・・・・ 8
1 第1ブロック・北部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
2 第2ブロック・中部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
3 第3ブロック・南部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40
Ⅴ 研究の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 56
Ⅵ 課題と展望・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 59

はじめに

～本誌刊行のお礼にかえて～

四日市市幼児教育センター(以下センターという)が開設し、一年がたちました。この間、開設準備及び開設後の運営にあたり、四日市市で共に就学前教育・保育にかかわる保育士・幼稚園教諭・保育教諭(以下保育者という)の皆様や関係機関等の皆様のご協力、ご支援をいただき今日に至ることができました。

センターの「３つの機能(『研修』『訪問　相談支援』『情報発信　研究』)」は、すでに様々な形で利用していただき、浸透しつつあるのではないかと思っています。
その中の、「研修」「研究」については、「教育・保育施設職員研修年間計画」において「Ⅳ　実践研修　公開保育(研究)実践検討会」と位置付けし、取り組んできました。

センター開設と並行し、取り組み始めた研究においては、講師の先生のご指導をはじめ、公開保育実施園の職員の皆様や多くの方にご尽力いただきました。研究の成果の一端としまして「令和５年度　四日市市幼児教育センター研究紀要　第１集」を作成し、皆様にお届けできうれしく思っております。この研究紀要を手に取っていただけたことを深く感謝いたします。

令和５年４月に発足したこども家庭庁は「こどもがまんなかの社会を実現するためにこどもの視点に立って意見を聴き、こどもにとっていちばんの利益を考え、こどもと家庭の、福祉や健康の向上を支援し、こどもの権利を守るためのこども政策に強力なリーダーシップをもって取り組みます。」とうたっています。

子どもを権利主体としてとらえた就学前教育・保育について、センターより、発信し、対話し、それぞれの皆様の取り組みの振り返りにつながっていけるように願っています。この紀要が今後の研究及び皆様の取り組みに反映されることを期待しております。

研究紀要

遊びが子どもたちの未来をつくる
～子どもの主体性からの育ちをつなげる～
就学前教育・保育の展開

Ⅰ　研究主題について

Ⅰ四日市市幼児教育センター設置意義より

　センターでは、各就学前施設におけるグランドデザインを尊重し、子どもの幸せのために、保育者の質向上をめざして各就学前施設職員がつながりをもち、研究を重ねていく場を生み出していくことを大事にしていきます。また、公開保育(研究)を実施することで、保育実践を交流し、子どもにとっての最善の利益を考えあう場としていきたいと思います。

　この設置意義をもとに、研究主題を「遊びが子どもたちの未来をつくる～子どもの主体性からの育ちをつなげる～就学前教育・保育の展開」と設定し、各就学前施設及び関係機関と連携し、本年度の研究を行いました。

　子どもたちとその子どもたちを取り巻く保育者をはじめ多くの人たちが、子どもに視点を置いた様々な行動が起こせるような就学前保育・教育の在り方を、当センターと共に考え、それぞれの就学前施設に少しでも反映できる持続可能な研究を続けていきたいと思います。

研究紀要

Ⅱ　今年度の研究について

1 研究の目的

本研究では、「遊びが子どもたちの未来をつくる～子どもの主体性からの育ちをつなげる～就学前教育・保育の展開」と主題を設定しました。そこで、一年次である本年度は、「子どもの遊びをとらえ、子どもの心の動きや姿(好奇心、探究心、思考力、粘り強さ、調整力、協同性など)を読み取ること、子ども理解を進めていくこと」と考え、目的としました。そのために、３つの着眼点を見出しました。

2 研究の着眼点

1）　子どもと環境に視点を置き遊びの展開を読み解く

まず、子どもと環境については、「五感を通じた体験や遊びを通じて総合的に学ぶ」(中央教育審議会 初等中等教育分科会幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会―第２回会議までの主な意見等の整理―より)という、就学前の子どもの学びの特性を踏まえ、「子どもの体験」と「環境…人やものとのかかわり」に注目し、実践を考えていくようにしました。

次に、岐阜聖徳学園大学教授の西川正晃氏より「非認知能力とは遊びきること。幼児教育の本質を明らかにする力。自分を高めようとする学びに向かう力」であり、「保育者の在り方は、遊びや生活の主体者としての存在。保育者自身の主体性が問われる。子どもと共に遊びや生活を紡いでいく対話的関係（共主体）」とセンター主催研修会にて、重要なポイントをご教示いただきました。

上記の２点から、子どもと環境、保育者を着眼点とし、遊びをとらえることとしました。

２） すこやか・つながり・まなびのめばえの視点で 保育者の子どもへのかかわりを考える

「四日市市就学前教育・保育カリキュラム」（＊１）のビジョンにうたわれている「すこやか」「つながり」「まなびのめばえ」の三つの視点から、保育者と子どものかかわりを分析します。

桜花学園大学教授上村晶氏は保育者の子ども理解を保育者と子どもとの関係性からとらえ、「保育者の子ども理解とは、保育者と子どもが協働的に“わかり合い”を紡ぎ出す絶え間ないプロセスである」「保育者の子ども理解は、保育者と子どもを取り巻く多様な文脈に開かれた理解である」「保育者と子どもの関係性は、非常に揺らぎやすい基盤の上に成立することを自覚しよう」とセンター主催の研修で講演されました。

子どもの遊びや生活を通して、保育者のかかわりを整理し、子どもの主体性の育ちにつながる子ども理解になりえるよう、三つの視点から就学前教育・保育の内容を読み解いていきたいと思います。

＊１　令和５年度において、「四日市市幼児教育・保育研究協議会」にて社会状況を見据え「こどもの権利」を中心に、就学前教育・保育の在り方に対して、忌憚のない意見を交流しあい、子どもたちの未来を展望し、協議し策定されました。これからの時代に求められる力を確実に身に付け、子どもたち一人ひとりのもつ可能性を最大限に伸ばす教育・保育の実現に向けて、共に歩んでいくために活用していくカリキュラムを言います。

３） 幼児期の終わりまでに育ってほしい１０の姿から子どもの遊びを考える

就学前の教育・保育を通して育まれた姿を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」とし、小学校教育との円滑な接続を重視し、保育所保育指針や幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領では、「小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮し、幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うようにする」「育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教育が円滑に行われるよう、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会などを設け、『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』を共有するなど連携」を図り、「小学校教育との円滑な接続を図るよう努める」とされています。

三重大学教授富田昌平氏は、センター主催保幼こ小連携・接続研修の中で「遊びや環境を通してさりげなく学ぶ。それが幼児期の教育」「さりげなくとは、あくまでも子どもが中心。保育者は子どもの遊び・生活の環境の構成者。指導・援助者。」と講演されました。「さりげなく」を見極め、子どもの学びの連続性を見通せるよう子どもの遊びの方向性を探るようにしました。

Ⅲ　研究の方法について

１研究の方法

　施設類型を超え、保育を実践交流する意図を踏まえ、公開保育を行い実践を検討しあえるようにします。
　公開保育実施園においては、担当アドバイザーや実践検討会司会者と打ちあわせし、担当講師より助言指導を受けながら、公開を実施します。
　公開にあたって、同一形式の事前資料(＊２)を公開保育(研究)参加者に周知し、公開後、アンケート調査方式(＊３)で、実践検討会前に参加者の感想・意見を集約し、実践検討会資料として配布します。

１）　実践研修　　公開保育(研究)の方法

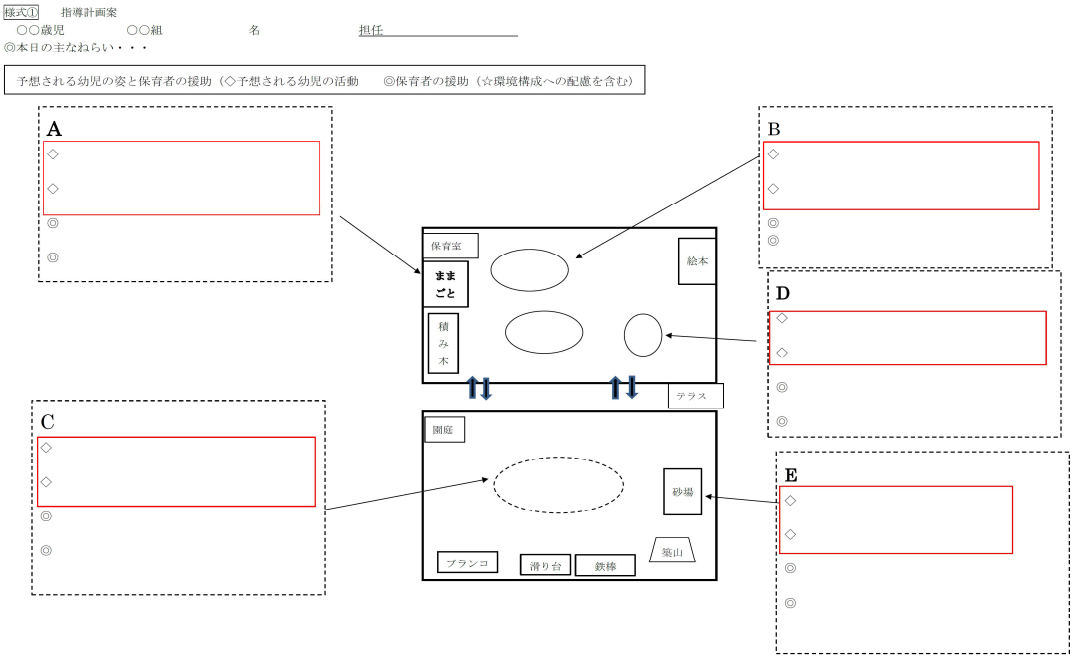
10:00～11:00　公開保育
11:00～11:30　公開後参加者アンケート回答

２）　実践研修　　実践検討会の方法

　各ブロックアンケート回答集計を資料とし、担当アドバイザー、司会者、講師との事前打合せのもと、討議形式や講師の助言指導を取り入れ実施します。

＊２　事前資料形式　公開保育実施園作成

様式①　指導計画案



様式②　デイリー

様式②　記入例

デイリー　月　日（　）　組

時　間	内　容
８：３０～	○順次登園する ・身支度をして遊び始める
９：３０頃	○みんなで朝のあいさつをしたり、歌をうたったりする
１０：００頃 （公開保育）	○戸外や保育室で自ら選んだ活動をする （様式①参照）
１１：２０頃	○みんなで片付けをする ○トイレを済ませ、手洗い・水分補給をする ○みんなで活動をする ・絵本を見る
１２：００頃	○給食を食べる

＊３　当日公開参加者は、ＱＲコードを読み取り、
以下のアンケート内容に回答します。

問１　所属

問２　所属種別

問３　名前

問４　職務年数

問５　参観したクラス

問６　本日の遊びの中で、もっとも子どもたちが楽しく、生き生きと遊んでいたと思う場面はどこでしたか。☆指導案に記載されている遊び(Ａ．Ｂ．Ｃ．Ｄ・・・)の中から一つ選んで、ご回答ください。

問７　問6で、選んだ場面を具体的にご記入ください。

問８　問6で選んだ遊びは、主に「１０の姿」の中で、どの学びにつながると思われましたか。下記の中から選んでください。

問９　本日の環境構成や保育者のかかわりで参考にしたいところがあれば、ご記入ください。

問10　本日の感想などを含め、ご意見や保育者への質問など、ご自由にご記入ください。

上記のアンケート結果をクラス別に集計し、資料とします。

Ⅳ　実践研修〔公開保育(研究)・実践検討会〕

Ⅰ第Ⅰブロック・北部　　実践研修〔公開保育(研究)・実践検討会〕

友だちと一緒に遊び、いろいろな気持ちを共有し、人とかかわることの心地よさを味わう。

思いを伝えたり、聞こうとしたりする子どもの心の育ちを丁寧に追いながら、保育者のかかわりについて学びあっています。保育者と子どもが共に生活を営み、考え、学び、主体性の育ちにつなげています。「共主体」について、実践から考えあいましょう。

研究紀要

１）　公開保育（研究）

（１）

保々こども園概要

四日市市立保々こども園　　四日市市西村町２７２５－１
０５９－３３９－０９１９

クラス編成

歳　児	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	4歳児	5歳児	合計
クラス名	さくらんぼ	いちご	みかん	もも	れもん	りんご	ぶどう	
在籍児数	3	14	14	19	16	16	25	107

教育・保育目標	生きる喜びを分かち合うなかで自尊感情を育み、 心身ともに健やかに伸びる子どもを育てる
めざす子どもの姿	「今」を未来につなげられる子ども 豊かな感性　　やりきる態度　　生き抜く基礎を培う だいすき・つながる　　じっくり・やってみる　　すこやか・まなぶ
めざす園の姿	心のふるさと保々のまち～「つながる」の視点から～ 子どもたちが夢中になって遊ぶ園
園内研修主題	育ちのプログラム」の６つの視点で子どもの育ちをみる ～「つながる」の視点・遊びの中の「学び」を意識しての取り組み～
重点目標	①夢中になって遊ぶ＜学ぶ＞教育・保育内容の充実 ②健康で安全・安心な生活の保障 ③特別支援教育・保育の充実 ④小・中・高・プラザ・地域・保護者との連携と協働

（2）当日の4歳児の様子

いらっしゃいませ、ケーキをどうぞ

ボールに砂と調節しながら水を入れ、泡立て器で混ぜる子がいた。キッチン台に見立てた机には、ケーキ作りのレシピが置いてあった。「ケーキを作ろう」「どうやって、作るのかな」などと、その場にいる子どもたちがイメージを広げ遊んでいた。ケーキの型が出来上がり、机に置いてあるどんぐりやいちょうの葉などの自然物を飾ってケーキを完成させていた。

そして、準備が整ったと言わんばかりに「ケーキありま～す」と声を出していた。その声を聞いた保育者が、周りで一緒に遊んでいた子どもたちに「後で、買いに行こう」と声をかけていた。その保育者の言葉で、ケーキ屋さんが店を開いたことを知った子どもたちが、徐々にケーキ屋に訪れていた。

そして、さっきまでキッチン台だった机にはケーキが並べられ、店屋のショーケースに変わっていた。

どんぐり、まつぼっくり、小枝、落ち葉などの自然物を使って作ろう

テラスに設定されている自然物に関心を持ち、子どもたちが、友だちと会話しながら、自分の作りたい物を作り上げていった。出来上がった作品は、保育者がディスプレイを考え、一人ひとりの作品が光るよう室内に飾っていた。

ウレタン積木で、シーソーを作って遊ぼう

ウレタン積木でシーソーを作り、乗って楽しんでいる子のそばに、友だちが一人やってきた。「乗せて」「いいよ」とやり取りし、二人で揺れていた。そこへもう一人友だちが来て、「私も乗せて」といい、乗ろうとしたが、三人は乗れなかった。

困った三人は、保育者に「三人で乗りたいけど、乗れないからどうしよう」と声をかけた。保育者は、「どうしたら乗れるだろうね」と言葉を返しながら見守ることにした。すると、子どもたちは、三人で相談し、乗る順番を変えたり、体を寄せあったりし、いろいろ試しはじめた。

ついに、自分たちで工夫し三人で乗ることができ、「三人で乗れた」と声を上げはしゃいでいた。

（3）当日の５歳児の様子

ホテルごっこで遊ぼう

友だちと手分けして、木製箱積木を組みあわせて、ホテルを作り始めた。

一人ひとりが自分のイメージしていることを出しあい、相談し、役割分担し、ホテルの部屋を作る子、お風呂を作る子、料理を作る子などに分かれた。

出来上がると、いよいよホテルでの一日が始まった。

一人の子の発想から、部屋を移動し花火を見に行くことになり、移動した先の部屋にあるホワイトボードに、花火の絵を描き見立てていた。

そこで、保育者が花火の効果音を鳴らすと、子どもたちが「オォー」と歓声を上げ、花火大会に浸っているようであった。そして、ホテルの部屋に戻り、食事したり、お風呂に入ったりし、友だちとイメージを共有し言葉をやり取りし、遊んでいた。

こまを回して遊ぼう

子ども一人ひとりが、こまを回せるようになりたいという思いをもち、毎日、コツコツとひもの巻き方や回し方など繰り返し工夫してきた様子が分かるような姿で楽しんでいた。自分がつかんだひもの巻き方や回し方のコツを、回せずに困っている友だちに伝えようとしたり、励ましたりして、様々な感情に共感しあい、何回も取り組んでいた。

また、こまが回っている時間を競ったり、芯の上に落ち葉や色を塗った紙などを乗せることで回っている模様の見え方の違いを発見したりし、遊び方を工夫し発展させていた。

２） 公開保育(研究)参加者アンケート回答結果より

（１） 本日の遊びの中で、もっとも子どもたちが楽しく、生き生きと遊んでいたと思う場面

ごっこ遊びで使える衣装が数多くあり、ラーメン屋さんごっこを楽しんでいた。木製箱積木もあり、場所を区切って自分たちでコーナーを作って遊んだり、カウンターのように見立てて遊んだりと、イメージが膨らんでいた。また、自分たちで作った画用紙の携帯電話を通して、友だちとのやり取りを楽しんだり、保育者と共に、日常の会話をしたりして楽しんでいた。

木製箱積木で作った家に入り、それぞれがごちそうを作ったり、カプラでイメージした物を作ったりし、夢中になって遊んでいた。

ホワイトボードに子どもたちが花火の絵を描き、そのイメージを膨らませられるよう場面を共有したり、花火の効果音を流したりしていた。

木製箱積木でままごと（ホテル）を作り、お風呂の掃除をしたり、ラーメンを並べたり、花火大会を見に行ったりなど、お客さんとのやり取りを楽しんでいた。

木製箱積木で一つの物を作りながらも、それぞれのブースがあり、そこで思い思いに遊びながら周りの友だちともつながっていた。やり取りを楽しみながら遊びが続いていた。

子どもたちが自由に木製箱積木を組み立てて部屋やお風呂を作ったり、様々なごちそうを作ったりと、イメージを膨らませながら友だちや担任とやり取りをして楽しんでいた。また、お金のやり取りをする場面もあり、お金が足りないと「作ってあげる」と友だちの分のお金を紙やペンで作って製作する子の姿もあった。

ホテルごっこと花火ごっこがつながっており、花火を見てホテルに戻りご飯を食べていた。その中でご飯を作り始める子、奥の製作コーナーで色画用紙をはさみで切り始める子、部屋で友だちとホテルごっこのやり取りを始める子など、自らしたいことを選んで遊び始めていた。時々「何しとんの？」と聞いたり答えたりして、遊びが広がっていた。

こま回しを誰が長く回せるか競争し、保育者や友だちと勝負し、長く残った子が喜んでいた。

こま回しで失敗しても何度も何度も回していた。「友だちより長い時間回したい」「グラグラせずに回したい」「上に乗せるパーツが回った時にどのような模様になるかを見たい」など、それぞれの子が目的をもって遊んでいた。また保育者や友だちが励ましあっていた。

こまを回すだけでなく、こまに葉っぱを乗せてみたり、別の回し方をしてみたりと考えて遊びを進めていた。そこから自分の発見を友だちや先生にも伝え、遊びが広がっていた。

こま回しで、複数の友だち同士で「せーの」と声をかけあい、誰が一番長く回るか競争していた。特に、板の上ではなく、テラスの端でもこまが回り続けているのを見て、驚いていた。

ウレタン積木で、シーソーを作っていた。三人で乗りたいようだったが、その時は二人しか乗れなかった。子どもたちが保育者に「三人で乗りたい」と相談し、保育者は「どうしたら乗れるかな？」と答えた。三人が自分たちで考え、三人でシーソーに乗れた時、三人ともがキャーキャー言いながらとても楽しそうにしていた。三人は保育者の名前を呼び、「三人で乗れたよ！」とうれしそうに報告していた。

ウレタン積木でシーソーを作り、一人で揺れていたところから友だちが加わり、二人で楽しみ、三人で乗れる方法を自分たちで工夫し、いろいろな乗り方があることを発見していた。その横では家作りが始まり、作っている物は違うが、場所を共有していることで会話があり楽しんでいた。

子ども同士で相談しながら、ウレタン積木でプールをイメージして作り、プールに水を入れる水路、飛び込み台など、試行錯誤して取り組んでいた。飛び込み台が、安定するように組みあわせていた。

ウレタン積木で飛び込みごっこのような遊びをしていた時、少し怖がって飛ぶのをちゅうちょしていた子に対し、友だちが下にウレタン積木を置いて、着地しやすいようにしていた。

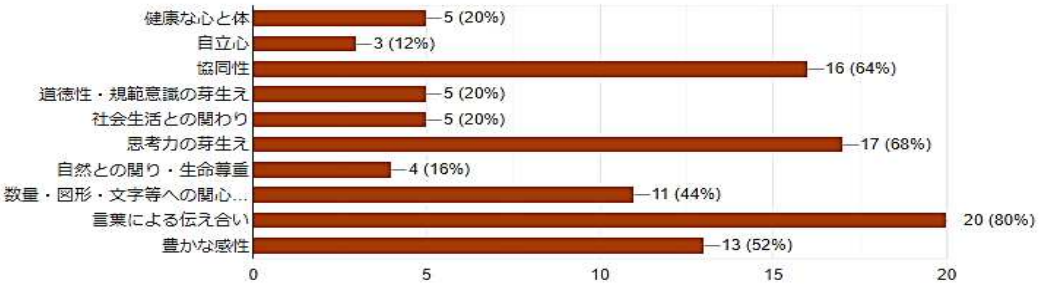
ウレタン積木を重ねて、橋わたりのような遊びをしていた。
友だちを誘って自ら選んで遊び出していた。準備された様々な素材から、自分でイメージしてそれぞれで作り始めたものの、会話して伝えあったり感想を言いあったりして楽しさを共有していた。

いちょうの落ち葉を集めては、保育者と一緒に飛ばして遊んでいたことと段ボールでお風呂のような物を作ろうと試していた。風が吹いた日でもあり、葉っぱが風に飛ばされている様子を楽しんでいた。

昨日からの続きで、木の実や砂を泡立て器で混ぜケーキ作りを楽しんでいた。他クラスの子も入り混じり、それぞれの思いを出しあってケーキを作っていた。

ログハウスで遊んでいる時、言葉のやり取りをし、水の量を調節したりイメージを共有したりしていた。

（２）　選んだ遊びと「１０の姿」のつながり



（３）　環境構成

遊びを残しておける場があり、それが隣の近い場所にあることで子どもが部屋を行き来しながら遊びが発展していた。木製箱積木とままごとの遊びもそれぞれでも落ち着いて遊べるように区切りはあるが、完全に遮断されておらず互いの遊びが見えるようにつくられていた。

木製箱積木やキッチンのおもちゃを使って、本物のお店を再現し、ごっこ遊びのイメージが広がっていた。

（４）　保育者のかかわり

周りの友だちとつながれるように言葉をかけかかわっていた。

子どもと同じ視点に立って、励ましたり思いに共感したり、友だちの気持ちに気付けるように言葉をかけていた。

保育者がどうするか提案するのではなく、子ども同士で友だちの表情や気持ちに気付いて寄り添えるように声をかけていた。

よい聴き手となり、子ども主体で学ぶことができるようにかかわっていた。

（５）　小学校への学びのつながり

子どもたちが一つのことだけでなく、様々な場をつくり自分のやりたいことを選んで遊べる環境づくりが、子どもの環境を通しての学びである。

遊びを通して学ぶことと教科を通して学ぶことをつなげる。

就学前教育・保育にとって、保育者のかかわり方や場づくりが日々の子どもの学びである。

就学前教育・保育での子どもの育ちを小学校そして中学校への学びへとつなげていくことが大切である。

３） 実践検討会

（１） 担当講師より説明

① 保育カンファレンスとは

研修会では、解決策や正解を求めたり、同じ保育観や子ども観を共有したりすることを目的とすることがあり、教えると学ぶという上下関係が話しあいの基盤になりやすい。しかし、保育カンファレンスでは、経験年数などによる上下関係の立場ではなくそれぞれの見方を述べあっていく。対等性を保ち、それぞれの違いを多様性と受け止め、一つの見方を価値あるものとし、結論は出さない。ゴールフリーで出しあうだけでよいという考え方である。

② 保育者の資質能力の形成

資質能力とは、自分自身のポケットを膨らませることである。様々な保育観・子ども観を自分自身のポケットにいっぱい入れていく。ポケットに入れたものを様々な子どもとかかわる時に取り出し、思い込みやルーティン化から脱却していくことが大事である。保育カンファレンスを通して、資質能力を高めていってほしい。

③ 主体性とは

主体性とは何か、保育の場合は「幼児期の終わりまでに育ってほしい１０の姿」で説明できる。子どもが遊び込んで、１０の姿が発揮されていくことである。子どもが遊び込んでいく過程に１０の姿が表れる。遊びの結果は失敗でも成功でも構わない。過程が大事である。例えて言うと、泥団子を作る過程で、「どうやって作ろう」と考えたり、友だちと相談したりし、自立心や言葉による伝えあいや思考力の芽生えなど様々な姿が見られるのである。遊び込んでいないと、１０の姿は見られない。

④ 主体性を育む保育とは

遊び込む保育である。遊び込むことを存分に支える保育である。子どもが興味関心のあるものをずっと遊び込むことができたら子どもの育ちはどうか考えてほしい。遊び込むために、環境構成や保育者の援助を考える。くり返し遊び込む環境やくり返し遊び込む援助を考えることが大事である。

研究紀要

（２）保育カンファレンステーマ

① 主体性を育む環境や援助は？(担当講師より提案)

・遊び込むためにどのような環境を構成していたか。

・こう環境の(再)構成すればもっと遊び込めた。

・遊び込む(める)ためにどのような援助が行われていたか。

・保育者がこう働きかければもっと遊び込めた。

（３）カンファレンス報告(各グループの交流意見)

① 遊び込むための環境について

家・段ボール・木製箱積木・砂場のケーキ等、子どもが「また、続きで遊ぼう」と思える環境があった。子ども一人ひとり、遊び込むまでの過程に差がある。そのため、園生活の中で遊びが一旦中断してしまうことがあるが、作った物などをそのまま置いておくことで、「後でしよう」「さっきの続きがしたい」という思いを実現できる環境になっている。

テラスの秋の自然物・素材・チョコレートケーキレシピ等、イメージを広げ子ども自ら作ることができる自然物や素材の設定があった。その設定で、子どもたちが作りたい時に製作を始め、子ども同士で考えあい作っていた。また、作った物を部屋に飾り、遊びの続きとして、ごっこ遊びに発展するような工夫がされていた。

子どもたちの発想で木製箱積木を構成したり、素材を使ったりし、ごっこ遊び（ラーメン屋さん、ホテルごっこ、お風呂ごっこ、ケーキ屋さんごっこ）を楽しんでいた。

部屋の前のテラスに大きなベニヤ板が置かれ、その板の上でこま回しができ、そのそばにはこまの芯に通しこまにかぶせられる様々な紙の素材が置いてあった。こまを回すことや、回るこまの模様を着せ替えるように紙を芯に通し回す子どもの遊び込む姿が見られた。

② 保育者の援助について

子どもの言葉や遊びに保育者が寄り添い、場面に応じて、保育者が言葉がけし、子どもたちが状況や友だちの思いに気付き、イメージを広げ、共通の体験につなげていく援助になっていた。

子どもに、「どうしたいか」「どうする」「どうしてだろう」などと言葉を返し、選択をゆだねたり、考えたりできるようにしていた。また、こま回しの場面で、子どもが「やりたい」と思える励ましの言葉がけをしていた。

（４）公開保育実施園保育者の省察・感想

①　遊び込むための環境について

一人ひとりの子どもが遊び込める環境について、日頃から考え環境を整えているが、難しいと思うこともある。公開保育を受けることで、普段は気付きにくいことを参加者から意見をもらえ、自分自身や保育の振り返りになった。

活動の関係でその都度片付けることもあったが、子どもたちから「残しておきたい」という声が上がった時は、クラスのみんなで相談し、残すようにしてきた。「明日もしようね」と、遊びの継続を期待する姿になっていった。

②　保育者の援助について

子どもたちの言葉を拾い環境づくりに生かしていくようにした。

遊びを継続し、遊び込む環境づくりにつなげていくために作った物を残すことを考えていった。

子どもたちと共に、子どもたちのやりたい遊びを準備していった。

子どもが「やりたい」と思える言葉がけをしていった。子どもの「遊びたい」「もっとやりたい」と思えるきっかけをつくるようにした。「やりたい」がかなえられた子の思いを周りの子にも伝え、共感できるつながりをつくっていきたいと思っている。

子どもが安心して遊べるように、子どもたちのイメージや発想に耳を傾けながら、一緒に遊びをつくっていきたい。

主体的な遊びをつくっていくためには、保育者が子どもと共に楽しいと感じることが大事だと思った。

研究紀要

Ⅳ 実践研修〔公開保育（研究）・実践検討会〕

実践研修　講師紹介　**岐阜聖徳学園大学教育学部教授**

西川　正晃氏

公立小学校教員を十数年勤めた後、大学院を経て大学附属幼稚園教員として実践を重ね、大学附属幼稚園副園長、全国幼児教育研究協会県支部長、関西国際大学教育学部准教授、大垣女子短期大学教授・学科長を歴任。保育実践を語る会「土曜の会」の企画や開催。
著書『幼児期及び幼保小接続期の
教育の質的向上 』　他多数

４）　実践研修　　講師助言まとめ　第Ⅰブロック・北部

（Ⅰ）遊び込むことができる環境について（５点のポイントから）

① 遊びの過程、痕跡が見える環境。
どんな遊びをやっているかというプロセスが見える遊びがあるか。

② 遊びが混在しない環境。
例えば、一つの机でカードゲーム、製作、絵を描いていたら遊び込めない。散らかるのは、遊びが混在しているからである。

③ その場所で全てが揃うことである。

④ やりたくなるモデルがある。
やらないでいる子がやってみたいと思うようなモデルがあることが大事である。

⑤ 自分で選択することができる。

（２）本日の保育を振り返って（遊び込むための環境）

５歳児のこま回しの場面は遊び込むことができる環境がすべて揃っていた。まず、遊びの痕跡、過程が見えた。「ああ、ここで、こうしてやっている」「昨日こうしたよね」「負けたよね」と思いを巡らせ、イメージできた。

次に、遊びが混在しない環境があった。この環境で、ままごとや描画はしないだろう。こま回しが十分できる環境であった。

そして、こま回しができる全てが揃っていた。子どもが、「こま回しをしたい」と思える環境であった。

また、やりたくなるモデルがいた。「この子、すごい！」と子どもや保育者など、あこがれるモデルがいた。最後に、自分で選択することができた。「こま回しをやりたい」と興味関心をもち、こまを回す子どもたちがいた。

4歳児のウレタン積木の場面

ウレタン積木で温泉を作っていたが、食事の時間になった。子どもたちは頑なに「片づけしない」「いやや」と答えていた。そこで、保育者は、もう少し温泉を移動させてこの部屋で給食を食べられるようにスペースを作ろうと提案していた。残すということは、遊びの痕跡、過程が見えるため、「ようし、じゃあここは、危なかったからここを補強しょう」と次の遊びにつながったり、更にブラッシュアップした遊びにつながったりしていく。もし片付けていたら、ゼロからになる。例えば、1,000ピースのパズルを750枚まで埋めて、「さあ続きしよう」としたら、「はい、お片付けです」と全部片付けると、また、明日ゼロから始めることになる。そうなると、もう、遊び込む気力がなくなってしまうのと同じである。こういう場面こそ、保育者の主体と子どもの主体がどのように折りあいをつけるかが問われるのである。保育者が考える以上に、子どもはいろいろな考えを出すことができる。子どもたち自身が考えられるよう投げかけることが大事である。

園庭も同じである。園庭はデコボコがあれば、子どもたちは運動する。子どもたちが遊びたいと思い、やりたくなる環境であるからだ。しかし、ほとんどの施設で園庭は平らである。運動会があるから平らにしている。３６５分の１日のために、３６４日を犠牲にしていることになる。それならば、デコボコして走れるような場所がない所でも、どういう運動会ができるかということを子どもと一緒に考えることが必要ではないだろうか。

4歳児のリース作り

やりたくなるモデルがあり、自分で選択できる環境であった。ここにいけば、遊びの痕跡・過程があり、遊びが混在しない環境であった。しかし、ハサミをすぐに取り出せなかった。ここにハサミがあれば、全てが揃う。用具が揃っていないと取りに行くことになり、「ハサミ」「材料」「テープ」と揃えようとし、その間に、興味関心が薄れてしまう。例えば、テープを探しているところへ、他の子に「何しているの？私、〇〇しているの」と声をかけられると、「これで遊ぼう」と遊び始めていた気持ちが途切れてしまうこともある。遊び込むためには、その場所で全てが揃うことが必要である。

部屋の机について

　机が出してあり、ここに来たら、様々な物が自由に使え、一見すると合理的に見える。が、どの机を使ってもよいということは、「ここにブロック持ってきて」「ここでボードゲームやって」と、子どもが次々に遊具などを持ってくることになり、遊びが混在してしまう。４歳児のリース作りのように、全てがその場所にあるとよい。そして、そこに出来ればモデルがあるといい。完成させた物があったり、プロセスの分かる物があったりすれば、子どもの心が動く。「すごい、わたしも作りたい」と子どもが遊びだす環境が大事である。

掲示板について

　掲示板に作った物を飾るという感覚について、話したい。掲示板とは作った物を飾る場ではないと思う。その場で全て揃うことが大事なのであるから、作った物をすぐそこに置く、飾る場所が必要である。それが掲示板であると思う。掲示板とは、子どもたちが自分で飾る場である。
　例えば、芋の絵が掲示してあり、そこには芋というモデルも飾ってあった。さて、それを見た子が「すごい芋が描いてある、自分も描きたい」と思った時はどうだろうか。全てが揃って一体化している環境で、芋を描くのである。完成した絵や、芋を描きたくなるような大きな芋があり、そこに行けば絵の具があるというように全部パッケージされていると、集中して遊び、飾りたくなる、そんな子どもの姿が見られるのではないだろうか。

（３）表現する過程を大切にすることについて

　保育のプロセスを大事にしていく。プロセスを大事にする意味は、遊び込んでいる姿そのものであるからである。遊び込んでいく中に１０の姿を発揮していくという姿を私たちは期待している。それが栄養となっていく。例えば、正しい数字や量が分からなくても数字への関心・感覚が豊かであれば、小学校の算数は意欲的になる。数字の書き方や計算を知っていても、意欲がなく数字の面白さを知っていなければ栄養にはならない。主体的な深い学びにはつながらないのである。

子どもの育ちを栄養豊かにしていくこと、つまり、非認知能力を育てることは、プロセスを大事にしていくことである。だからこそ、遊びの過程を大事にしていくとは、出来上がった物を飾るという感覚ではなく、いかに子どもたちの遊びのプロセスを大事にできるかということであり、今、問われていることでもある。子どもたちの遊び込む姿を自身の保育の鏡として見ていくことが大事である。面白いなと思うことを子どもたちとつくっていくとよい。

（４）遊び込むことができる援助について

「遊び込むことができる援助」について、援助の話をすると、どうしても方法論として受け止められがちである。例えば主体性というテーマがあると、主体性を育てるために保育者は「こういうふうなことをする」と方法論になってしまいがちである。これからの時代は違う。「こうしたら子どもの自発性が担保できる」「こうしたら勉強が意欲的になる」という教師目線での方法論ではなく、保育者と子どもがより崇高なものをつくっていくという感覚をもつことが必要である。

こども基本法が令和５年４月に施行され、各地の「子ども子育て会議」にかかわっている。そこで、「子どもの考えを会議に反映させる」「社会をよりよくするために、子どもの意見を尊重し、子どもが参画できるようにする」と、活発に議論されている。子どもは私たちが忘れ去っている発想や考えられないような規格外のことを出してくる。それを一つの選択肢とし、私たちの今までの経験や知識など、互いに出しあって、よりよいものをつくろうという社会変革の一員として子どもの存在をとらえていくことが大事である。

保育は社会変革をしていくための大切な営みである。「こうしたら、子どもたちは育つよね」という視点ではない。「こうしたら、もっと遊びが面白くなるよね」「こうしたら、もっと生活が豊かになるよね」、小学校以降なら「こうしたらもっと深く学べるよね」と、考えていく。主体性という言葉に、我々はとらわれて、それを呪縛のようにして、「主体性だから、子どものやりたいことを尊重しながら陰になって支えましょう」ということではない。「主体的で対話的な深い学び」の「対話的」というのは、先生も参画して意見を出しあい対話することである。

（５）共主体について

ＯＥＣＤの「OECD Future of Education and Skills 2030 project(教育とスキルの未来2030プロジェクト)」その中の「Student Agency for 2030」エージェンシーとは主体性ということである。今、言われているのはCo-agency(共同エージェンシー）という言葉である。子どものとらえ方に８段階ある(下図表参照)。私たちが思っている主体性は７段階までを表しているといっていいだろう。子どもは保育者の援助を受けて遊び、主導し方向性を定める。保育者は意見を求められたり、子どもが意思決定しやすいようにアドバイスをしたりするが、最終的に全ての意思決定は子どもが行なう。これは７段階めである。これからの教育の２０３０年モデルは、子どもが遊びを主導していくが、意思決定は子どもと保育者の共同で行なわれる。遊びは、子どもと保育者が対等な立場で、方法論ではない、よりよいものをつくっていこうCo-agencyつまり共主体である。私たちは、保育でどう子どもを育てようかという考え方のレベルから脱却して、「子どもも育ちます」「私も育ちます」「一緒に育ちあいたいから、いい遊びをつくろう」「いい生活にしていこう」とよりよいものを一緒につくっていくことが求められている。子どもを育てるということから脱却し、一緒によりよいものをつくっていくパートナーとなる。保育者も保育者として成長したいという存在として、共主体の姿勢で、「保育をするのではなく」「保育を子どもと一緒につくる」「一緒につくるというかかわり」という感覚をもつ。保育者のよさを出しながら、子どもの主体性とのガチンコ勝負によって保育を成り立たせていく時代になってきていることを知ってほしい。

0.	沈黙	若者が貢献できると若者も大人も信じておらず、大人がすべての活動を主導し、すべての意思決定を行うのに対して若者は沈黙を保つ 。
1.	操り	主張を正当化するために大人が若者を利用し、まるで若者が主導しているかのように見せる。
2.	お飾り	主張を助ける、あるいは勢いづけるために大人が若者を利用する。
3.	形式主義・形だけの平等	大人は若者に選択肢を与えているように見せるが、その内容あるいは参加の仕方に若者が選択する余地は少ない、あるいは皆無である。
4.	若者に特定の役割が与えられ、伝えられるだけ	若者には特定の役割が与えられ、若者が参加する方法や理由は伝えられているが、若者はプロジェクトの主導や意思決定、プロジェクトにおける自分たちの役割に関する判断には関わらない。
5.	生徒からの意見を基に大人が導く	若者はプロジェクトの設計に関して意見を求められ、その結果について報告を受けるが、大人がプロジェクトを主導し、意思決定を行う。
6.	意思決定を大人・若者で共有しながら、大人が導く	大人が進め、主導するプロジェクトの意思決定の過程に、若者も参画する。
7.	若者が主導し、方向性を定める	若者が大人の支援を受けてプロジェクトを主導し、方向性を定める 。大人は意見を求められたり、若者が意思決定しやすいように指針やアドバイスを与えたりするが、最終的にすべての意思決定は若者が行う。
8.	若者が主導し、大人とともに意思決定を共有する	若者がプロジェクトを主導し、意思決定は若者と大人の協働で行われる。プロジェクトの進行や運営は若者と大人の対等な立場で共有される。

四日市市幼児教育センター　教育保育研修
「非認知能力を育む保育実践
-保育者のあり方を問う-」

OECD Future of Education and Skills 2030Conceptual learning framework Concept note : Student Agency for 2030 の 仮訳
https://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/studen agency/OECD STUDENT AGENCY FOR 2030 Concept note Japanese.pdf

GIFU SHOTOKU GAKUEN UNIV. 西川正晃 3

研究紀要

Ⅳ　実践研修〔公開保育(研究)・実践検討会〕

2　第２ブロック・中部　　実践研修〔公開保育(研究)・実践検討会〕

様々なことに関心をもち、遊びを楽しむことで、好奇心や探究心、学びへの基盤を育む。

遊びを豊かにする環境構成と保育者のかかわりについて、子どもの学びから、園内で実践を話しあっています。参加者の方の実践も交えながら、主体的・対話的な学びについて意見交流しあいたいと思います。

研究紀要

１）　公開保育（研究）

（１）

橋北こども園概要

四日市市立橋北こども園　　四日市市東新町２６－３２
０５９－３３１－４０４９

クラス編成

歳　児	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	3歳児	4歳児	4歳児	5歳児	5歳児	合計
クラス名	さくらんぼ	いちご	ばなな	みかん	りんご	もも	ぶどう	めろん	すいか	
在籍児数	5	20	23	16	17	23	22	19	20	165

教育・保育目標	遊びや生活を通して、子どもの主体性を大切にしながら、 生きる力　共に生きる力を育てる
めざす子どもの姿	健康で明るくたくましい子ども 人とのかかわりを楽しみ、自分から挨拶のできる子ども 自ら考え意欲的に取り組む子ども 物事に感動し豊かに表現する子ども
めざす園の姿	子どもや保護者にとって楽しいこども園 小中との連携を密にし、地域から信頼されるこども園 あたたかい人間関係を育てるこども園
園内研修主題	遊びや生活を通して、豊かな言葉や人とかかわる力を育む
重点目標	①コミュニケーション力のある幼児の育成 ②幼児の姿・発達に応じた教育保育の工夫 ③小中学校、地域との交流の充実 ④子育て支援活動の充実

（2） 当日の4歳児の様子

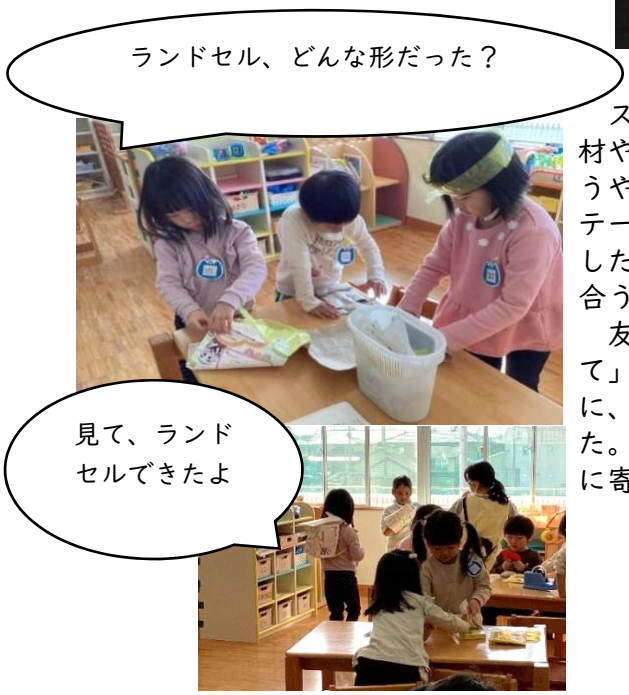
マルです。ラーメン、食べに来てね

友だちと「どうしようか」と相談しながら、せっせとウレタン積木を並べ始めた。ままごと遊具を運び、「ラーメン屋さんごっこしよう」と遊びが始まった。紙にマルとバツのマークを描き、入り口に貼っていた。「お店が閉まった時はバツね」「マルになったら食べに来てね」と自分たちで考え、お店に来てほしいと思い、友だちにも伝えていた。マルのマークの紙を貼りお店が開店、「いらっしゃいませ」と声をかけ、お客になった友だちが「ラーメン」と頼むと、すかさず「オレンジジュースがサービスです」と声をかけていた。

楽器でどんな音が聞こえてきたかな・・・

カスタネットやトライアングルを使い、音を鳴らし確かめていると、次々に友だちが集まり、そばに置いてあるＣＤデッキやポンポンを使い、音楽に合わせたダンスが始まった。体を動かし、耳に聞こえる音が心地よく、イメージが広がっていった。

ランドセルができるかな・・・



スズランテープ、広告、セロテープ、ハサミ等の素材や道具を上手に使い、ランドセルを作っていた。どうやって折ると紙が四角い立体になるのか、スズランテープの長さや付ける位置など、自分で考えたり、試したりしていた。繰り返し、試し、自分のイメージに合う形や位置が一致し表情が和らいでいた。

友だちの様子を見て、「どうやってしたの？教えて」と声をかけ、「いいよ」と答え、友だちと一緒に、子ども同士で夢中になって作り上げようとしていた。完成すると、うれしそうに背負い、保育者のそばに寄っていき、アピールしていた。

（3）当日の５歳児の様子

段ボールで車を作ろう

段ボールをかぶって遊んでいた子が保育者の言葉かけをきっかけに「ランボルギーニ（スポーツカー）作りたい」と、早速、段ボールやペンなどの道具を使い作り始めた。車側面（ギザギザ）の部分やマフラーなどは自分で工夫して作っていた。自分一人でできないところや、壊れてしまったところなど、困ったことは保育者に助けを求め、やり取りし、自分でもどうするか考え、友だちもそっとそばに寄ってきて、協力しながら作り上げた。

出来上がったスポーツカーを頭からかぶり、猛スピードで走り始めた。

木製箱積木の船に乗って

一人で、木製箱積木を運び、形を整え、組み立て、船を作り始めた子がいた。そこへ、紙を丸めて魚を捕まえるための餌を作る子、「船を運転するのに、道が分からないから地図がいるね」と地図作りをする子など、友だちの遊びに触発され、「やってみたい」「何をしよう」と考え、イメージを共有していく遊びが生まれていた。友だち同士で、それぞれが思いを伝えあい、どうしたらいいかやり取りしながら遊びが発展していった。

２） 公開保育(研究)参加者アンケート回答結果より

（１） 本日の遊びの中で、もっとも子どもたちが楽しく、生き生きと遊んでいたと思う場面

段ボールや空き箱、ガムテープで消防車を作っていた。そして、友だち同士でやり取りをして作りたいイメージを共有していた。また、図鑑を見て細かい部分を表現しようと材料を探しに行き、友だちに思いを伝えていた。集中して遊んでいた。

段ボールをかぶっていた遊びから、車や猫などに見立て、工夫して作っていたところや写真、絵本などを見ながら友だちと相談し、消防車を作っていたところ。

段ボールの中に隠れながら前に進んでいくことを友だちと楽しんでいた。その後、段ボールに耳やしっぽが付き、猫になったり、車になったりしていき、遊びが発展していった。

木製箱積木を友だちと組みあわせてイメージを共有しながら秘密基地を作り上げていき、出来上がっていった。

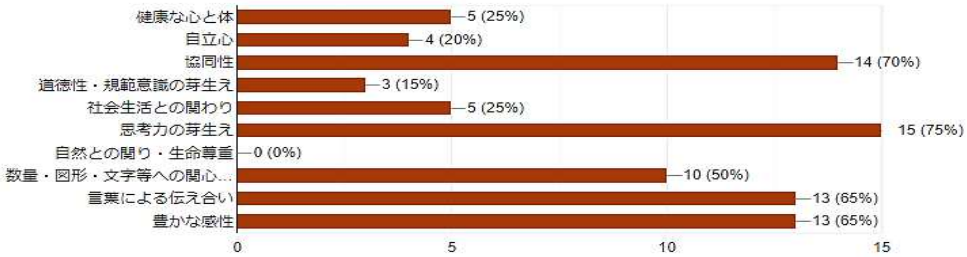
廃材を使って玉を転がすようなコースを作っていた。転がるようにコースを工夫していたり、玉を作ったりしていた。保育者のかかわりを通して、友だちが入り一緒に転がしたり、できた玉をみんなに見せに行ったりしていた。

ウレタン積木のお店には店内もあり、友だちや保育者とやり取りをしていた。お客さんがいなくなると他のクラスに呼び込みに行き、異年齢でのかかわりがあった。

広告やセロテープ、スズランテープを使い、自分が思うもの(広告の中のマークを切り抜いたり、ランドセル)を作っていた。

保育者が子どもたちから出るいろいろな楽器のリズムに共感し、いろいろなリズム遊びを子どもとしていた。カスタネットやトライアングルなどを鳴らしながら、子どもが思い思いに体を動かし楽しんでいた。すぐそばに、ポンポンやＣＤデッキも用意され、たくさんの子どもたちが集まり、音楽に合わせてダンスをしていた。

（２）　選んだ遊びと「Ｉ０の姿」のつながり



（３）　環境構成

カラーのガムテープ、ビニールテープ、空き芯等必要な物が、自分たちですぐに使える場所にあり、主体的に遊びが進んでいた。

段ボールや割箸、ガムテープ等の素材がいつでも手に取れる場所にあり、十分に遊び込んでいた。部屋の中や廊下を広く使っていた。

ガムテープなどがたくさん用意してあり、子どもたちが思いきり使うことができていた。また、スズランテープのそばに個人のハサミが置いてあり、自分で使う長さを決めて使っていた。

楽器やポンポン、ＣＤデッキ等、子どもが自分で使いたい時に使えていた。

（４）　保育者のかかわり

子ども同士で考えて、お互いに伝えあえるよう適所で保育者からの認める声かけがあり、子どもが満足いくまで楽しめていた。

「こうしたい」「ここがうまくいかない」と困っている子どもに対してポイントが明確になるように言葉をかけていた。

子どもたちの考えたことややりたいことを聞き取り、保育者がかかわることで、子どもが達成感を味わっていた。

常に様々なコーナーに目を配り、声をかけたり、アイコンタクトをとったりしていた。一人の子が玉転がし（アルミホイルで作っていた）を作ると、保育者がワクワクした顔で試していた。そこで終わるのではなく、「めっちゃおもしろいから友だち呼んできてもいい？」と尋ね、声をかけていた。子どもが友だちの遊びに自ら気付くことも大切だと思うが、保育者がつなげることで、子ども同士が知りあい、友だちの新たな面を発見できていた。

主体者の共同体として一緒に考えたり、ともにアイデアを出しあってかかわっていた。

その時々で手伝う場面と子どもの気持ちを尊重し見守る場面があり、子どもの言葉がけに笑顔で答え、子どもが保育者に話したり相談したりしていた。子どもの楽しんでいる姿を認め、保育者がねらいをもちかかわることで、さらにイメージが広がっていた。

「どうやって作ろうか、先生も一緒に考えるわ」と子どもと一緒に方法を考えたり、「また困ったら呼んでね」と見守ったり、一人ひとりに応じて、また絶妙なタイミングで、声をかけていた。

子どもたちが困っているところに「どうしたらいいんだろう」「友だちにも話してみる？」と投げかけることで、子どもの発想が生まれたり、友だちと話しあったりして遊んでいた。

子どもが安心し、自分の力を発揮したり、より意欲的にまた次のアイディアを出したりできるようかかわっていた。

子どもたちに対して肯定的な言葉がけをし、保育者間でも子どもの製作の様子やよさを即時に共有していた。子どもは、自分のやろうとすることが認められ、応援してもらえていると感じ、部屋が安心できる居場所になっていた。また、保育者の問い返しで、自己選択していた。

子どもに対して、心で思ったことを(プラスのこと)声に出してつぶやくことで、子どもの“ひらめき”につながり、遊びが広がっていた。

子どもたちの言葉に答える時、「～ちゃんはどう？じゃあ後で教えてね」など、応答的なかかわりをし、子どもたちの自立心につながっていた。

（５）小学校への学びのつながり

子どもたち自身が自分の解決したいこと、困っていることなど、必要に応じて他者とかかわることができる状況があり、子どもたち自身が必要な時に必要な情報を集めることができる力を育んでいた。

子どもたち自身が、自分、図鑑、作品を行ったり来たりできる状況があり、学び続けられる要因になっていた。

３）実践検討会

（１）公開保育実施園保育者の省察・感想

①　4歳児

折紙を折り方の本を見て子どもたちが自分で工夫したり、折り方が分からないところは子ども同士で聞き合ったりし遊んでいる。また、紙遊びの製作は今までずっと楽しんできていた。紙を切ることに熱中したり、切った紙を貼り合わせたりしていた。徐々にその紙を立体的に作り上げようとする姿も見られるようになってきた。子どもたちのイメージから、かばんやおばけ、ハンバーガー等、自分が作りたい物を作り、それがまた、子ども同士の中で伝わって広がり、作り方の工夫の変化が見られた。素材を扱うことで、ハサミやテープなどの使い方も変わってきた。

ごっこ遊びもよくする遊びで、遊びの様子を見て、クラスの友だちが関心を示し、広がっていくことが多いが、ごっご遊びのイメージを共有できにくい子もいるため、子どもの様子を見ながら、保育者が一緒に遊び仲介するようにしている。

今日は、ウレタン積木でお店屋さんごっこを二人ぐらいから始め、後から子どもたちが加わり、広がっていった。看板を作ったり、「今はお休みだよ」と相談したりしてごっこ遊びの中でのやり取りがあり、なりきって遊んでいた。

②　５歳児

７月頃より段ボールの家作りが始まった。壊れたら直し、遊び終わったら掃除をし、模様替えをしている。自分たちが作った家だから大切にしたいという子どもの思いを受け止め、残している。子どもたちと会話して遊んでいるが、自分の思いを言えなかった子も数人いた。遊びを通して、同じ空間でイメージを共有し、遊びの中で思いが言えるようになってきた。

水族館作りは、魚以外にも水をきれいにする機械を作り、そこから乗り物作りに興味を持ち始めていった。道路、消防署、水槽作り等、それぞれの思いを出しあいながら乗り物作りを楽しんでいった。

図鑑を置くと、「虫、作りたい」という子がいた。多目的ホールに一人でいた虫作りの好きな子に「家に虫がいたら楽しいのとちがう？」と声をかけたら「やってみる」と言って、とんぼなどいろいろな虫を作っていた。

保育者が「こうしよう」と言うと保育者主導になる。こちらの声かけの難しさを感じるが、保育者主導にならずに「やってみよう」と子どもが思う声かけについて、日々学んでいる。今日、段ボールをかぶっていた子がいた。「これを動物や何かにしてみたら面白いのではないか」と声をかけたら「車が作りたい」と言った。保育者の言葉でイメージが広がっていくのを子どもから学んだ。

（２）本日の子どもの姿から

①　4歳児についての討議

「いらっしゃいませ、ラーメン屋さんです」と言っても、なかなかお客さんが来ないため、５歳の部屋や多目的ホールに呼びに行っていた。クラス内だけでなく、他に来てもらおうと考え行動する姿に４・５歳児で遊んできた経験を生かしているのだと思った。

ラーメン屋さんで、「ドアはセンサーで開く」と聞いた子が、手を差し出してドアを開けていた。子どもたち同士のイメージが共有されていると感じた。お客さんが来なかった所へ保育者が行き、「何がありますか」とやり取りしていたことが、周りの子に伝わりお客さんになっていった。「メロンソーダまだですか」などと、楽しそうに会話する姿に「言葉による伝えあい」の姿につながっていると感じた。

広告紙で小さいユーチューブやツイッターのマークを切りたいが、思うように切れず、「もう、これじゃないんや」と言いつつ、最後まで諦めずにやりきっていた子がいた。頭にスズランテープを巻きウレタン積木遊びしている友だちに、「僕はうまく作れやん。作り方を教えて欲しい」と声をかける子もいた。製作する子どもの姿に、互いを知りあう関係や作りたい物を最後までやりきるなどの育ちが見受けられた

平面から紙を折り、貼りあわせるテープを少しずつ切り、ランドセルを作っていた子は、「どんな形やったっけ」と、紙を曲げたり物が入るよう工夫したり、自分のイメージに近づけようと黙々と作っていた。一人ひとりのしたい遊びが１０の姿の育ちにつながっていると思った。

②　５歳児についての討議

消防車を作ろうと図鑑をみて「これはこうで」と子どもたち同士で細かい部分のイメージをやり取りし共有していた。その様子を保育者が見守り子どもたちの思いを受け止め、時には、認める言葉がけをしかかわっていた。
様々な素材集めを子どもたちで行い、見つからない時は保育者に相談し、友だちと一緒に作ることを楽しんでいた。

段ボールをかぶっていた子の楽しんでいる様子を保育者が認め、さらに遊びが広がるように声をかけたことで、友だちとつながっていった。

段ボールの家が立たずに困っていると「どうしたらいいかな」と保育者がかかわり、友だちとイメージを伝えあいやってみるがうまくいかなかった。でも、何度でも試し友だちと協力し最後までやりきっていた。

木製箱積木で二人で作り始め、途中で二人のイメージに違いが生まれてきたようで、思いが共有できずに繰り返しやり取りしていた。二人でしばらくそれぞれの思いを言いあい、徐々に雰囲気が悪くなってきていたが、周りの子がそのやり取りに気付き仲介しようとしていた。

Ⅳ 実践研修〔公開保育(研究)・実践検討会〕

実践研修　講師紹介　**桜花学園大学保育学部教授**

上村　晶氏

長野県内幼稚園に勤務の後、愛知県内の保育専門学校教員、高田短期大学助教等を歴任
2014年より桜花学園大学保育学部保育学科准教授
2019年より桜花学園大学保育学部保育学科教授
2020年名古屋市立大学大学院人間文化研究科博士後期課程修了
著書　『保育者は子どもとどのようにわかり合おうとするのか』他多数

４）　実践研修　　講師助言まとめ　第２ブロック・中部

遊びが子どもたちの未来を創る

−幼保小の円滑な接続を見通した主体性を考える−

（Ⅰ）本日の公開保育にみる子どもの姿から

「指導計画のねらいは、保育者の意図性があり、今日の保育の中で子どもたちにどんな姿が芽生えて欲しいと考えているのか。ここに保育者としての専門性の一端がみえる」とのことで、まず、各クラスのねらいと保育について助言指導をいただいた。

①　４歳児ぶどう組

【ねらい】遊びや生活の中で、様々な材料や用具の使い方を知り、工夫しながら楽しむ。

＊素材との対話、用具との対話である。そして、友だちと一緒に工夫し「どうしたらよいか」などのやり取りも生まれる。(ねらいに対して講師より)

ウレタン積木の場面では、友だちと話しあい、エリアを広げていった。作りながら、「こうだよね」「あーだよね」とやり取りしイメージを重ねあわせていた。協同性というと力を合わせると思うが、協同性は力を合わせていくまでに至るプロセスが大事である。葛藤もあり、気持ちが折りあわない場面もあり、それをどう乗り越えてイメージをすりあわせながら作り上げていくかが大事である。

ＱＲコードを切りたい子が、一生懸命切っていたが、ハサミの持ち方がぎこちなかった。自分の中で「こうしたい」というイメージをちゃんともっていて「ここの四角を切りたい」「ここの楕円を切りたい」と思うもののイメージ通りにいかない。

うまくいったかなと思った時に「何とか切れたね」と声をかけると「違うんだよ。こうじゃないんだよ」とはっきりと返答していた。

失敗するからこそ、ハサミの持ち方が段々、本来の持ち方に変わってくる。うまくいかなかったからこそ、よりどうしたらよいのかを自分の中で考えられる道筋ができてくる。保育者が「こう持ったらいいよ」というのは簡単である。ケガを防ぐだけなら言うべきという理解もある。しかし、自分の中であみだしていくからこそ、用具の使い方が分かり、素材との対話が出来るようになる。５歳児になると、ペットボトルの底を回しながら切ったり、立体を切ったりする姿が見られた。これは、一年の成長と経験の蓄積である。

②　４歳児もも組

【ねらい】友だちと一緒に過ごす中で自分の気持ちを言葉で伝えようとする。

＊伝えあいが出来るような関係づくりが友だちとの間や保育者との間でできているか。伝えられるとは、聴いてくれる相手がいて初めて伝えたい思いが出てくる。普段いかに自分の話を聴いてくれる保育者や友だちの存在があるかが伝えあい活動の基本である。（ねらいに対して講師より）

ラーメン屋さんの子に「何やってるの？」と聞くと「ラーメンがないラーメン屋さんです」「何それ？」と言うと「違うの、今、売り切れなの」と返事が返ってきた。また、全然違う所からラーメン屋さんの当事者ではない子が「４５分になったら開店します」と話してくれた。全然違う場にいても共有している姿があった。ラーメン屋さんの子に「４５分になったら開店するって聞いたから、４５分になったら来ていい？」と聞き４５分に再度行くと、ラーメン屋さんの札がかかっており、ラーメンを作る準備をしていた。自分の中でイメージをもち、店員になりきり「オレンジジュースも入れておきます。これお願いします」となりきって遊び、見立て遊びの一端として、自分の役割をきちんと全うしようとしている姿があった。これをどうしたらラーメンになるのか、オレンジジュースを入れておくためにはどうしたらよいかなど、一生懸命考えている姿があった。こういったやり取りが、５歳児の協同性につながっていくのである。共通の目的に向かって自分は何の役割を担っていけばよいか考え行動することで、周りのことを考えた思いが出てくることが大事である。

③　５歳児めろん組

【ねらい】遊びの中で友だちと考えを出し合って、相談しながら遊びを進める楽しさを味わう。

＊自分の思いを伝えると今の遊びより、よくなる世界をイメージしながら伝えられるか。ただの主張ではなく、みんなのアイデアを出しあうことが「もっとよくなる」と考えられるか。自分の思いを伝えることによって、遊びにどういう波動を起こし、よりよくなる価値が理解できているか。

５歳児の１２月になると、集団としての熟成度、集団が育ってくる時期である。行事も経験し、一年間の積み重ねがある。互いに認め合い、互いの価値を敬うところがある。（ねらいに対して講師より）

スポーツカーを作りたい子が、窓枠を赤ペンで描き、段ボールカッターで保育者に切ってもらい、再度組み立てていくが、窓枠が破れてしまっていた。「どうしましょう」と保育者が言うと、「自分で（保育者自身で）直してください」と言った。子どもは周りをよく見ている。「どうしましょう」と聞かれた時に、「自分で考えてみよう」「自分で直してみよう」という言葉が、今までの経験の中で蓄積されてきた。担任や周りの保育者から「いっぱい考える」ことを促してもらう声かけが染みているから、子どもにとって担任は一緒に考える人で同じ地平に立っているイメージをもっているのを感じる場面で、うれしく思った。破れた窓枠は、他の子が「こうするといいよ」と赤いガムテープで補強してくれた。自分で考える。そして、自分たちで考える。友だちの困り感にも自分が出来ることで支えていく子どもが育っている姿であった。

段ボールカッターで水槽車を作りたい子が保育者に６か所穴を開けてもらっていた。その後、子どもが自分で、穴にハサミを入れ、とがった部分で、穴を大きくする。保育者がするのは最小限であった。後は自分たちが知恵を絞ってどうやって穴を開けるか考えていた。自分たちで作りたいイメージ通りにできそうなことは、保育者に頼りすぎないように育つ過程が大事である。自分たちでやりたい思いが子どもの中から湧き出ているところが、自立して何かを考えていく力につながっていくのである。

④　５歳児すいか組

【ねらい】友だちと思いや気持ちを伝えあいながら、一緒に遊ぶ。

＊遊びを通して「子どもが」どうなるかのイメージをもち、伝えあいができる関係性が基盤である。伝えあえるということは、聴いてもらえる他者の存在があることを保育者が理解しておく必要がある。（ねらいに対して講師より）

木製箱積木を使って自分のイメージで作っていた。「四人までしか入れません」と言っていたが「やっぱり二人まで。一人は自分。どっちから入る？」と作り手が言い、互いのイメージを伝えあっていた。外から見ると一人で作っているように見えるかもしれないが、対話をして「これ、何に使ったらいい？」「どうしたらいい？」とやり取りがあった。やり取りが起こるというのは、遊びの場として分断しているように見えても子ども同士がつながっているのである。

（２）幼児期になぜ遊びが重要なのか
～幼保小の円滑な接続の観点から～

幼児期の遊びとは、遊ぶこと自体が目的であり、時がたつのも忘れて夢中になって楽しむことの中に多様な発達につながる要素が潜在する。遊びそのものに意味がある。遊びの中の学びというと学びを達成するために遊びがツールのように思われ、手段にされるが、遊びが目的、ゴールであり一番大事なところである。

幼保連携型認定こども園教育・保育要領に、「主体的で対話的な深い学び」の充実について示されている。「主体的で対話的な深い学び」を５歳児から小学校につなげていく「架け橋プログラム」について、文科省より小学校との接続を５歳児の一年間、小学校1年生の一年間をかけてじっくりやっていくよう令和４年度から通達が出ている。

より緊密に接続していくことが、「架け橋期」にふさわしい「主体的で対話的な深い学び」を子どもの育ちに実現するために大事だと言われている。そこをどうつなげるかは「幼児期の終わりまでに育ってほしい１０の姿」である。「１０の姿」は物差しのようにツール化するのではなく、トンネルである。ゴールにするのではなく、到達目標でもない、方向目標である。「こんな姿が出てくるといいな」というとらえで保育の振り返りの足がかりにしたり、要録を活用したりして小学校教員と子どもの育ちを共有していくとよい。

（３）幼児の主体性をどのように見取るか

「主体的で対話的な深い学び」を実現していくには、子どもの主体性が大事である。主体性を語るのは難しい。他市で主体的に遊ぶ子どものイメージは何かを聞いたら、四つに分かれた。自由感があり、自己選択性に富んでいて、自己表現ができ、友だちと協同できる姿があげられていた。現場の保育者レベルで感じる象徴的なものである。それに対してどんな配慮をしているかを聞くと、「空間がある」「選択の多様性を保障する」「季節感」「安全」「協同性」等であった。

「自主性」「自発性」「主体性」は、似ているが意味が違う。「自主性」は決められていることだからする。「自発性」は決められているかどうかではなく気付いたからする。「主体性」は自分の意思や判断にもとづいて行動を決定する。自分のためだけではなく、みんなのためにもどうなっているのかというイメージをより深く考える。自分の中で行動を決定する時に、もう少し高い精神性を要しているのである。

主体性は言うことは簡単であるが、実行するのは難しい。本当の主体性を考えると、価値付けや考える力など小学校以降に必要になってくるかもしれない。主体性を考える時に、「子どもに任せていいの？」「行事の時は主体性は発揮できない？」といろいろな疑問が起きたり、「養護を大事にしていたら主体ばかり言えない」「ケアの部分が大事」と主体的という部分と主導的という部分の混乱が起こりがちである。

主体性は「私やりたい」という子と「先生やってもいいですか」と聞く子の違いである。大人が主体的と主導的をはき違えていないか問い直す必要がある。主体性を大事にすると言いながら、大人の手の平で動かして引っ張っていないか。子どもは敏感に感じ、大人の目を意識して「先生、〇〇していいですか」と主体性からかけ離れて育っていく。保育は、養護の部分と教育の部分と両輪が働いている。養護と教育で揺らぐことがあるが、揺らぎつつも考えていくところに価値がある。悩むことで主体性ということを深掘りできると思う。

次に、めざしていくのは共主体である。上から目線にならず、子どもの主体性と大人の主体性は対等であることで子どもに向きあっていく。同じ地平に立って「どうしよう」を一緒に考えながら、子どもと共に保育を作り上げていくことが大事である。これが共主体である。

橋北こども園は保育ビジョンに「共に生きる力を育てる」を保育目標に掲げている。園自体が子どもと一緒に
というところを大事にしているからこそ、
今日の保育につながっていたのだと思った。

（４）まとめ

最後に、１０の姿は通過点である。ゴールにしない。１０の姿にうまくつながるようなアプローチカリキュラムやスタートカリキュラムを小学校と共に考えていくことが大事である。

橋北こども園の環境は豊かな環境だったと言える。環境構成の鍵は、子どもが改良できる余地を残しておくことである。よく言われているのが、ディズニーランドやＵＳＪを作りすぎないこと。そうしてしまうと、遊びの場でジプシーのように、あちらこちらに移動する子どもしか育たない。子どもが、「何かやってみようかな」とその日の遊びや翌日の遊びに楽しみの余地を残しておくと、自分で遊びの物語（ストーリー）を紡いでいく。環境の中で、子ども自身が主人公になっていく。自分の中で「〇〇がしたい」と自らの意思をもった主体として育っていくことが大事である。

令和の日本型学校教育の中では、保育者は子どもの学びを最大限に引き出す伴走者であると言われている。マラソンで例えると、走るのは子ども。水分を出したり、ナビゲートしたりなど、保育者自身が主導するのではなく、引き出していくことを大事にしてほしい。

保育の中にはプロセスがある。今日見たものだけが全てではなく、その裏側にどんなプロセスがあったのか、見えない部分に思いをはせることが大事である。指示が多くなりがちであるので、子どもの声に耳を傾け、それぞれ違う、多様でよいというところを尊重する意識をもってほしい。

Ⅳ　実践研修〔公開保育(研究)・実践検討会〕

3　第３ブロック・南部　　実践研修〔公開保育(研究)・実践検討会〕

生活や遊びを通し、思う存分
体を動かし、様々な経験を重ね、
自立心と自律性を育む。

子どもの主体性を大切にした豊かな体験と夢中になれる遊びを充実できるようにし、
学びの接続を考えていく‥‥
私たちの実践への意見を交流しあいましょう。

研究紀要

１）　公開保育（研究）

（１）

内部幼稚園概要

四日市市立内部幼稚園　　四日市市采女町９１１
０５９－３４５－４７０９

クラス編成

歳　児	4歳児	5歳児	合計
クラス名	さくら	きく	
在籍児数	16	13	29

教育・保育目標	健やかな心と体をもち、友だちと一緒にいきいきと活動する子どもの育成
めざす子どもの姿	★元気いっぱい遊べる子 ★自分や友だちを大切にする子 ★意欲的に取り組む子
めざす園の姿	～げんき★えがお★やるき　いっぱいの幼稚園～ ★子どもが夢中になって遊ぶ(学ぶ)豊かな体験ができる幼稚園 ★保護者や地域とのつながりを大切にする幼稚園
園内研修主題	幼児理解を深め、子どもの心が動く環境構成の工夫と 主体性を伸ばす教育実践
重点目標	★げんき★：健康な心と体の育成 ・「早ね・早おき・朝ごはん」の生活リズムを整える ・基本的生活習慣を確立し、自分の健康への意識を高める ・野菜の栽培や収穫祭などの体験活動を通した食育の実践 ・多様な体の動きが経験できる環境づくりと園外保育の充実 ★えがお★：様々な人と関わり合いながら自己を発揮し、 共に生活を作り出す力の育成 ・積極的なあいさつの推進 ・自分らしさを発揮し、互いに思いを出し合い、認め合う仲間づくり ・話を聴く力を育てる取組 ・豊かな感性を育てる絵本の取組 ★やるき★：身近な環境に興味や関心をもち、自ら考えてかかわる力の育成 ・経験したことを取り入れ、身近な物の性質や仕組みを活かした遊びの充実 ・目的に向かって考え、試したりしながら最後までやり遂げる力を養う ・自然に触れ、感動や気づき、発見に出会う機会を大切にする

（2）当日の4歳児の様子

どんぐりはどこに落ちるかな

ペットボトルをつなげた筒の上からどんぐりを入れると、、筒の中を通って、どんぐりがころころと転がり始めた。どんぐりが転がり落ちる先はいくつかあった。どんぐりの転がるスピードの勢いが余って途中で落ちることもあった。どんぐりの落ち方を見届け、そのたびに自分の思った通りだと歓声を上げたり、予測が外れると残念がったりしていた。友だちと相談し、どんぐりを入れる側、落ちる側に分かれ、どんぐりがどう落ちるか予測し友だちと驚いたり、不思議がったりし、言葉をやり取りしていた。

映画館が始まります。お寿司も食べに行こう！

今までに作ってきたチョコレート、キャンディーなどを持ち寄り、映画にする絵を描いた紙を準備し、映画館ごっこの始まり。映画になる絵をめくる役、ポップコーンやジュースを作る人、お客さんそれぞれの役になりきって遊びだす。映画が始まる前に、準備したチョコレートやキャンディーを配ったり、お客さんを呼び込んだり、映画が始まる前を存分に楽しんでいた。そして、回転ずし屋ごっこに遊びが変化していった。ここでも、今まで作ってきたお寿司が登場し、お店の準備が始まった。「私はお客さんしたいの、あなたはお寿司屋さんする？」と役割についてやり取りし、遊んでいた。お客さん役の子が「うどんが食べたい」と注文するが、見当たらずお店役の子が「じゃあ、作ってくるね」と声をかけ、隣の製作テーブルでうどんを作り、「はい、どうぞ」と渡した。

映画館の上映は難しい‥‥

模造紙に絵を描き、ひもでつなげ、めくって映画の画面を作っていた。ひもをどうつけようか、映画の終わりはどうしようと考えが浮かんでは試すことを繰り返した。模造紙が破れてしまう場面もあった。保育者は「直ったかな？」と声をかけ子どもたちの姿を見守った。映画の上映は次のお楽しみとなった。

研究紀要

（3）当日の５歳児の様子

海賊ごっこ

バンダナ、船、いかりなど、なりきっていける環境を自分たちで整え、海賊になりきる子、海賊船を本物に近づけようとする子、宝物を作る子など海賊からイメージするもので遊んでいた。ＢＧＭ（パイレーツオブカリビアン）が流れ、雰囲気が盛り上がった。

嵐のイメージや雷に疑問をもちどう表現しようかタブレットを使い調べ、考えていた。「なにこれ？」「見て！」「月みたい」「剣の色や」と画面を見ながら、一人ひとりが自分の思ったことを伝えあった。懐中電灯を使い、光を天井に当て、雷の稲妻を表した。

遊びが停滞していた様子をとらえ、保育者が幽霊役になりかかわると、イメージが共有され、「幽霊を捕まえよう」と子ども同士の目的意識が生まれた。また、夢中になりすぎて友だちが困っていることに気付かずにいる子らに保育者が声をかけ、遊びを振り返り、自分だけでなく友だちも楽しいと思える遊びに変わっていった。

片付けの時間になり、子どもたちの海賊船を残しておきたい気持ちを感じ、保育者がどうするかを投げかけた。記念写真に残したらいいという話しあいになり、片付け始めた。

２） 公開保育(研究)参加者アンケート回答結果より

（１） 本日の遊びの中で、もっとも子どもたちが楽しく、生き生きと遊んでいたと思う場面

子どもたちが作った物を使って遊び込んでいた。作った物を使ってお寿司屋さんごっこをし、また、遊び始めたら必要な物を作り、さらにイメージしながら遊んでいた。

お寿司屋さんをしている時「うどん」と注文がきた。前はあったようだが、うどんが見当たらず、作ることになった。「何がいる？」と保育者が必要な物を聞くと「画用紙」などと答え、自分一人で作り始めた。

映画をめくる役、ポップコーンやジュースなどを作る役、映画を見る役など、それぞれの役割があった。それぞれの役を楽しみ一つの遊びになっていた。そして、映画をたくさんの友だち、先生に見て欲しいようでいろいろな人を呼びに行っていた。

映画を始める前にジュースやポップコーンを売っている様子は、まるで、映画館で体験したと思えるようになりきっていた。また、映画が始まるのをじっくり待ち、「待って」という子に対しても、受け入れて待っていた。

自分なりに海賊に合わせた小道具やバンダナなどを身に付け、なりきり表現していた。音楽の効果、木製箱積木で作った海賊船、網、船の中で料理する場、海賊マークの旗、宝箱、地図など、一つひとつを作り上げ、継続している遊びがあった。また、その遊びの中で、子どもたちが思いを出しあい、つながっていた。

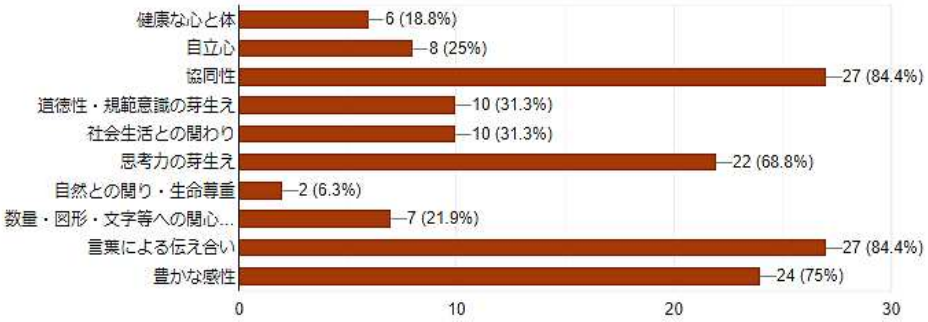
海賊船をイメージして遊びに夢中になっていた。子どもたち同士がかかわりあって戦いや宝探しをしていた。戦いなどアクティブな面だけでなく、箱や色紙等を使って料理をイメージするなど多様な遊び方をしていた。

海賊ごっこで、４対１の戦い場面で「４対１は無理」と友だちに伝え、立ち止まってみんなで考えていた。また、もっと海賊ごっこを楽しくしようと頭を突きあわせて考えていた。製作コーナーで宝物を作っていた子が友だちの遊びを分かっていて、海賊ごっことつながっていた。クラス全体がつながって遊びを進めていた。

「雷って何色？」という保育者の投げかけから、タブレットで検索し懐中電灯で雷を表現し、海賊とおばけになり遊びが広がっていった。

海賊ごっこをしている中で、雷を取り入れたいという意見から、それぞれのイメージを引き出しつつ、タブレットをうまく活用して実際の写真などを見て、色を確かめ、遊びに取り入れていた。

（２）　選んだ遊びと「１０の姿」のつながり



（３）　環境構成

おもちゃを使ってではなく、廃材を使って子どもたちが遊びを展開していた。

ごっこ遊びを十分に楽しんでいた。遊びの積み上げがあった。

子どもたちのイメージに少しでも近づけるような、材料や道具があった。

寿司の入れ物（スーパーで見たことのある物）をそのまま使ったり、くるくる回転できるようにしたりし、寿司を選んで取りやすくなっていた。

海賊船が木製箱積木や机などを使って表現されていたり、秋の自然物が色々な場所に飾られたりしていた。映画館ごっこをしていたが、保育者が子どもの遊びに合わせ、ウレタン積木の上を歩き迷路を楽しむような遊びに広げていた。

素材やＣＤデッキ（ＢＧＭ）、絵本などを自分で選び、海賊ごっこが思う存分に遊べるようになっていた。

（４）保育者のかかわり

子どもたちが困っていることや難しいと思っている姿に一緒に試行錯誤し寄り添っていた。子どもたちのやる気、意欲、期待を膨らませていた。

子どもが話しかけてきたことややってみたいと思ったことに応え、少しの手助けをし、子どもたち同士でイメージを共有したり、イメージを膨らませたりていた。

子ども同士で話したり、考えたりできるように、保育者は一緒に遊んだり、見守ったりしていた。

子どもたちで考えられるように「どうする？」と声をかけ、考えたり想像したりしたことを子どもが言葉にして伝えられるようにしていた。

（５）小学校への学びのつながり

子どもたちが様々な立場や視点から、自ら選択し決定して遊びに参加できる状況づくりは、小中学校における個別最適な学びと協働的な学びを充実させていくことにつながっている。

保育園や幼稚園の室内環境や子どもに見通しをもたせる手立て、工夫、視覚支援の方法などは、小学校への学びにつながっていると感じた。

保育者が自分でしてしまうのではなく、子どもに声をかけ、子どもが自分でやりきる、達成感を味わえるかかわりが子どもの学びにつながっていた。

３） 実践検討会

（１） 公開保育実施園保育者の省察・感想

① 4歳児

４歳児の前半は、初めての集団生活で、園生活が楽しいと思える関係づくりをめざし、一人ひとりが好きなこと、興味のある遊びを十分に楽しめるようにかかわってきた。

徐々に、友だちの名前を呼びあい、イメージを共有して一緒にやって楽しいこと、喜びあえる経験をしているところである。また、自分の思いを出せるようにしたいと考えている。言葉での表現が難しい時は言葉以外での表現を大事にしている。

ごっこ遊びでも一人ひとりのイメージをを保育者が受け止め、友だちと共有し、一緒にしようと思えることを大事にしていっている。

② ５歳児

友だちと一緒に「こんなことをしたい」「あれをやってみよう」と思い、友だちと一緒ならできると意欲をもち、友だちと一緒が楽しいと感じてほしい。友だちとの関係の中で、自信をもち、思いを伝えあう経験をたくさんしてほしい。そして、保育者も一緒に考える機会を大切にしながら、友だち同士で遊ぶ中で相手のことに気付いたり、自分で考えたりして行動する、調整できる力をつけていってほしいと願っている。

海賊ごっこでは、一人ひとりの思いを受け止め、楽しいあまりに気持ちが高ぶりすぎてしまう姿に応じて、保育者が仲介し、気持ちを相手に伝え、互いの気持ちに気付いていけるようかかわっている。

（２） 本日の子どもの姿から

① 4歳児の遊びの経過について

映画館ごっこは、１０月の誕生会でおやつをポップコーンの機械で作って食べた。その後「ポップコーンを作りたいね」と言って、紙で作り始めた。作りながら、ポップコーンと言えば「映画館で食べるね」と映画館をイメージし、「映画館を作りたい」と子どもたちがやりたがり、ウレタン積木の好きな子が作り始めた。用紙を保育者が準備して、画用紙にクレパスで色を塗ったり、プリンセスが好きな子はプリンセスを描いたり、チョコ、あめもいるとなり、映画館に行ったことのない子も「こんなイメージかな？」とごっこ遊びとして楽しむ姿につながった。

②　５歳児の遊びの経過について

積木遊びをしていた時、船のイメージをもち、船からアニメのワンピースの話になり、「ワンピースは大砲や海賊の旗がある」とイメージが膨らんだ。そこでアニメのワンピースを知らない子もいるのでタブレットで検索して、船も宝もあるとイメージを共有し、海賊の本を見て興味をもち、錨を作りたいとなっていった。一昨年の運動会で使った海の曲を流すとなりきって楽しんだ。運動会で使った「バンダナを頭に巻きたい」、絵本を見て「眼帯する」などなりきり、一緒に遊んでいなかった子も興味が出てきた。絵や写真、タブレットを見て、みんなのイメージがつながっていった。

③　4歳児の討議

お寿司屋さん、どんぐり、映画、製作コーナーなどの遊びも生き生きしていた。パッと作れる環境で、もっとこうしたいという子どもたちの思いにつながっていた。

お寿司屋さんで「うどんください」とお客さんが言い、うどんを探してもなく「うどん、今から作ります」と言うと、保育者が「何がいりますか」と聞き、「茶色い紙と白い紙がいる」と言い、素材の準備を手伝い、後は子ども自身が一人で作っていた。そして、お客にうどんを出していた。

全然映画が始まらなくても、待っていた。映画館ごっこしたい思いの表れなのか。
映画をめくりたい子、見たい子、食べたい子、作りたい子がいて、食べることに盛り上がったり、チケット作りを相談したりし、いろいろな楽しみ方があった。映画館ごっこにイメージを乗せて参加し、映画館ごっこのイメージを作り上げていく。実体験だけでごっこをしてるわけではなかった。

④　５歳児の討議

海賊、雷、荒波、海、今まで遊んできたものがつながっていた。海賊になりきっている子、宝箱を作っている子、一つの遊びの中でも子どもたちが遊びを選んでいた。部屋に子どもたちと楽しんでいきたいことが詰まっていた。

子どもたちが海賊船でイメージしたものを表現する中で自分で選択、決定して遊びに参加する仕組みがいっぱいあった。宝を隠す、船長になれる、コックになれる場、武器を作る、戦いの動き、乗り越える、潜り抜ける、飛ぶ、物を介して、相手と交わしあう場があった。

音に、穏やかさより荒々しさ、切迫感を感じた。音を聞くと戦い、対立をイメージする。子どもも対立という世界のイメージと日常を演じているような間接的イメージを持って遊んでいた。

Ⅳ 実践研修〔公開保育（研究）・実践検討会〕

実践研修　講師紹介　**三重大学教育学部教授**

富田　昌平氏

2018年より現職。博士（学校教育学）。
津市教育委員会委員、三重県幼児教育センタースーパーバイザー、津市子ども・子育て会議委員、伊賀市子ども・子育て会議委員長など。
2019年に第55回日本保育学会保育学文献賞を受賞。
著書　『幼児期における空想世界に対する認識の発達』他多数

４）　実践研修　　講師助言まとめ　第３ブロック・南部

（１）本日の公開保育にみる保育者のかかわり

①　4歳児

実践のなかでも、特に映画館ごっこが印象に残った。この遊びは、10月の誕生日会の際に、収穫したものでポップコーンづくりを行い、そこでの子どもたちの「食べておいしかった」「楽しかった」という思いをきっかけにポップコーンづくりのごっこ遊びが始まり、ポップコーンと言えば映画館ということで始まったとのことである。模造紙に映画の内容を保育者と子どもたちが一緒に描き、それをスクリーンに見立てて観客席の前方に吊るして映画館らしさを表現していた。ポップコーンの他に「ジュースも」「お菓子も」と広がっていったとのことである。

本日の映画館ごっこでは、ウレタン積み木をタテに重ねて、そこにひもで吊るした模造紙を上からひっかけて設置していた。模造紙をめくることで映画の物語の進行が表現されるという具合である。非常に素晴らしいもので、子どもなりのアイデアが詰まっていると言える。
一方で、実用的な点では限界があり、めくろうとするとそのたびに模造紙のひもが積み木から外れ、また模造紙の端がひもに引っ掛かり破れたりした。そのたびに保育者は修繕作業に追われ、観客役として参加した子どもたちも粘り強く待ち続けるものの、十分に上映することができなかった。
映画の上映によって観客たちを楽しませ、満足させるという当初の目標はかなわなかったものの、それでも映画館の支配人役の子どもたちも観客役の子どもたちも一様に楽しそうで満足気であった。それはこの遊びが、子どもたちが誰かに言われて始めたのではなく、自らすすんで始めたものであり、自分たち自身でつくり上げたものという自負があったからではなかろうか。

また、この日を迎えるまでに友だち同士のやりとりも含めた楽しい積み重ねがあり、そのことも子どもたちの粘り強い参加を後押ししたものと思われる。

とはいえ、その場にいた保育者としては葛藤もあったのではなかろうか。大人の手をもっと加えれば、ウレタン積み木に吊るすという不安定なものではなく、より安定した土台を作ることができ、それによりその場でのスムーズな進行も実現できた可能性が高い。子どもたちの楽しさや満足も、もしかしたらもっと得られたかもしれない。
つたないながらも子どもなりのアイデアをとるか、安定した展開のために大人の手をもっと加えるか。「子どものつたなさ」か「大人のしっかり仕上げ」か。このあたりにもしも葛藤があったとしたら、その内実を聞かせてほしい。（講師より質問）

今日、初めて紙の穴が破れてしまった。どうするとよかったのか。穴を開けるまでは直接積み木に貼っていた。シーンが変わるイメージをどのように具体化するか、めくる方法や違う素材を提案するなど子どもたちに聞いてもよかったかと振り返った。（公開保育担当保育者より）

実際、保育者が子どもと対話しながら保育をつくりあげていくというその姿勢こそが大切なのであろう。本時では、上映そのものは必ずしもうまくいかなかったかもしれないが、そのうまくいかなかったという経験は次の挑戦的環境の中で活かされていくのではなかろうか。子どもたちなりのアイデアが保育者に大切にされ、尊重されている限り、子どもたちからはまた新しいアイデアが次々と湧いてくるであろう。
自分なりのアイデアに愛着と自信を持ち、大切にすることができれば、子どもたちは新たな挑戦的環境を自らつくり出して、それと主体的に向き合い、取り組んでいくはずである。

②　５歳児

実践のなかでも、特に海賊ごっこが印象に残った。話を聞くと、そのきっかけはかなり偶発的で予想外の出来事によるものだった。
ある日、子どもの買ったばかりの靴の靴底がバリっと破れて壊れてしまった。靴がないため外で遊ぶことができない。仕方なく室内で大型積み木を使って船をつくり始めた。それを見てある子どもが「ワンピースみたい」と言い、それをきっかけに海賊らしい旗や大砲もつくり始めたそうである。海賊についてよく知らず、イメージができない子がいると、保育者がタブレットを使ってイメージを手助けする画像や動画を見せ、それによりイメージの共有も実現していった。

以前に運動会で使用した海賊の曲（『パイレーツ・オブ・カリビアン』）を流し、それらしくバンダナを身につけさせてやると、これが大ヒット。子どもたちは大いに気に入って、絵本や図鑑をもとにさらに海賊について調べ、剣をつくったり宝物をつくったり，盛り上がっていったそうである。

まさに子どもたちの「やりたい思い」を大切にした保育であろう。子どもたちの「あったらいいな」「こんな風になりたいな」という思いをその都度拾い上げ、子どもとの対話のもとにていねいにつくり上げていった実践であると言える。もちろん、いくら子どもの側に思いがあったとしても、子どもの想像する力や想像したことを現実化する力には限界がある。現実の目に見える素材や道具、土台となる経験が必要である。剣やマント、旗、マスト、帆など、本時では保育者と子どもとの対話にもとづくであろう創意工夫が随所に見られた。
例えば、荒海のなかにふりそそぐ雷を表すために、部屋を暗くして懐中電灯のオンオフを使ってそれを表現する姿が見られた。子どもたちの憧れや好奇心をきっかけとして生じた「やりたい思い」を大切にしながら、それを現実の制約の中でどのように昇華させていけるか、子どもと保育者による想像と現実との間の格闘を垣間見ることができた。

ところで、遊びのなかでは、子どもたちが剣を持ち、海賊になりきって振り回すうちにだんだんと気持ちが乗ってきて、エスカレートする姿も見られた。保育者や園によっては、子どもたちにあらかじめ戦いごっこを禁止し、回避しようとするところもある。
戦いごっこも他の想像的な遊びと同様に、子どもの憧れと好奇心にもとづく子どもらしい姿の1つである。そこから生まれる遊びもあるし、ほんのちょっとの危険から感じられるスリルを味わいたいという思いもある。また、遊びの戦いが本気の戦いにならないようにほどよい加減を経験的に学ぶこともできる。経験を通して得られる思いやりや痛みへの共感もあるだろう。とはいえ、危険であることも確かである。
仮に禁止せずに子どもが怪我をしてしまった場合、責任を問われることにもなるだろう。そのため、戦いごっこのように危険を伴う遊びを保育のなかでどのようにとらえ、どのようにかかわればよいのか、保育者には葛藤が生じる。このあたりの葛藤の内実について、もしもあれば聞かせてほしい。（講師より質問）

剣のところは、悩み日々葛藤している。４歳児では、戦いが大好きで危険な場面があり、禁止になった時期もあったが、手加減できるようになり、声かけしながらかかわってきた。
危険もあるが、力加減を分かってほしいという思いがある。子ども同士で危険な時は保育者が入って体を張って、保育者が「痛い」となると子どももはっとする。「今のは、よかった？」と声をかけ、海賊ごっこをやってきたが、はらはらする場面もある。まねっこも上手になってきたが、気持ちが高まった時は、違うもので「ここのミイラに大砲打つ？」などと、ちょっと方向を変えている。（公開保育担当保育者より）

研究紀要

実際、遊びのなかでの経験を通してバランス感覚を得ることは大切である。この程度なら大丈夫という主観的な感覚は、仮説的な言葉以上に実際的な経験によって根付いていく。
危険を保育のなかで子どもたちから遠ざけるのではなく、あえて意図的にある程度経験できるような環境や状況を用意して、経験から学ぶ機会を保障することは重要なことである。そのためには、保育者間や保育者と保護者間でよく意思疎通をし、また問題を我がこととして話し合えるような子ども集団の育ちと態勢の保障が大切であると思われる。

（２）子どもの「やりたい思い」を大切にする保育

公開保育実施園では、保育者が手をかけ過ぎない、出過ぎないなど、子どもを主体にしたかかわりの基本がおさえられていた。園内で大切にしたいことが職員同士でよく共有され、連携が取れていた。近年、いろんな園で「5歳児が幼くなった」という声をよく耳にするが、本園の5歳児は幼くなかった。それは保育者があまり出過ぎず、子どもの「やりたい思い」が実現できる（あるいは実現できそうな）舞台が整っていることにもよるだろう。

子どもにとって、園に行くと「夢中になって楽しめるものがある」ということは幸せなことである。児童文学の名作『あしながおじさん』のなかに次のような一節がある。「人はだれでも、あとで振りかえったときに幸せだったと思える子ども時代を過ごす権利がある」。子どもたちが大人になってふり返ったときに「あー、楽しかった」と思えるような子ども時代を過ごさせてやること、これこそが幼児教育・保育の究極の目標ではなかろうか。

映画館ごっこと海賊ごっこのこれまでのいきさつを尋ねてみると、意外と大したきっかけではないことに驚いた。強烈なインパクトのある経験があったに違いないと予想したが、4歳児，5歳児とも遊びのきっかけはほんのささいなことに過ぎなかった。
このことは、幼児教育・保育の本質と醍醐味を表している。乳幼児期の子どもとのやりとりの日常では、ほんのささいなことから思いもよらぬ展開が生まれ、大きなドラマへとつながる、そんなことが往々にしてありうる。

本日の実践者たちは、そうした保育の本質をよく知っていると感じた。ほんのささいなきっかけをもとに、子どもたちのやりたい思いをうまく拾い、子どもの心の動き、気持ちのノリ具合をよく把握しながら、ていねいに実践を進めていく。子どもの言葉や動きを取り上げたり、展開に合わせて素材や道具をそっと準備したり、状況に応じて環境を構成し直したりなど引き込まれる実践であった。新しい何かをともにつくり出していこうとする子どもたちや保育者の姿勢を全体として感じることができた。

4歳児の映画館ごっこでは、結局のところ映画は上映されず、外見的には具体的な成果が残らずに終わった。このあたりは子どもらしい面白さとも言えるが、例えば、これが小学校になると授業の単元は8時間で構成され、8時間目になると最終的な学びの成果と課題をふりかえり、ひと区切りをつけなければならない。

本日の映画館ごっこには、大人によって予定されたひと区切りは存在しない。それがいいところでもある。この遊びのピークはまだ訪れていないかもしれない。だからこそ、子どもたちの中で何かしらの消化不良感が生まれ、「もっともっと」と次の展開を求めていく。適度な消化不良感も遊びのプロセスの中では大事である。

一時的な消化不良の事実だけをとらえて、「今回の実践では子どもの学びがなかった」と評価すると、幼児教育・保育としては切ないものがある。幼児教育・保育は「ピークはまだ先かもしれない」と、区切りを先へ先へと見越しながら展開させていくもので、大人によって決められた区切りによって子どもたちに学びを一律に経験させていくものではない。

本日の5歳児の海賊ごっこも、もしかすると今日がピークだったのかもしれないし、あるいは明日がピークかもしれないし、もっと先にあるのかもしれない。

（３）遊びの世界と子ども時代

「あー、楽しかった」と思えるような子ども時代を過ごさせてやること、これが幼児教育・保育の究極の目標であるとしたとき、この「楽しかった」には、もちろん一時的な「快楽」のみではなく、年齢相応の「学び」が含まれる。

ものに興味を持って夢中になる喜び。新しいことをどんどん知っていき、知ることが増えていく喜び。自分が前よりも大きくなって、前よりも自信を持って生活することができるようになった喜び。

気の合う仲間や先生とともに、同じものを見つめ合って、同じことに不思議さや面白さを味わって、同じようにみんなで驚き、興奮し笑い合うことのできる喜び。こうした様々な喜びを体全体で感じながら学んでいくのが幼児期の学び方の特徴である。

子どもは小学校に行く前の5、6歳頃になると、世界のいろんなことをもっともっと知りたいと願うようになる。
児童文学の名作『プー横丁にたった家』には、ラストに主人公であるクリストファー・ロビンとクマのプーとの別れの場面がある。いつものように森の中で話をしながら、クリストファー・ロビンは「自分が一番好きなことは、何もしないでいることだ」という話をする。そして、そのように無為に過ごす中で出会った世界の様々な面白いこと、不思議なことを話すうちに、クリストファー・ロビンは自分が世界のそれらのことについてもっと知りたがっていることに気づく。
クマのプーはクリストファー・ロビンの話は自分には難しすぎて、もう話し相手になれないから、クリストファー・ロビンは自分のもとを去っていくだろうと思い至る。
しばらく黙り込んだ後、クリストファー・ロビンは「ぼく、もうなにもしないでなんか、いられなくなっちゃった」と言い、二人はお互いを忘れないこと、いつかまた戻ってくることを約束して森を後にする。

このように幼児期の学びは、子どもが無為に過ごすことを許してくれる遊びの経験を通して、得られていくものである。
一見すると無為にただ遊んでいるようにしか見えないような場合でも、子どもたちはそこから次への原動力となるような何かを手に入れている。とはいえ、それらは何だっていいわけではない。
子どもたちが「あー、楽しかった」と言えるような充実した日々を過ごすためには、驚きや興奮が必要で、それはその子どもの興味関心や発達の状態によって異なってくる。
保育者がそのことを見極めながら、子どもたちに「ほんの少しの背伸び」（ヴィゴツキーの言葉によると「発達の最近接領域」）を経験させていくことで、子どもたちの日々の遊びや生活はより充実したものとなる。

本日の公開保育実施園における研修テーマは、「子どもの主体性を大切にした豊かな体験と夢中になれる遊びの充実」であったが、まさにその言葉の通り、子どもの主体性を大切にした豊かな遊びが展開され、充実した保育であった。子ども時代の「あー、楽しかった」がよく伝わってくる実践であった。

研究紀要

Ⅴ　研究の成果

１「子どもと環境に視点を置き遊びの展開を読み解く」

実践研修〔公開保育(研究)・実践検討会〕第１ブロック・北部(以下第１という)の各グループの保育カンファレンスで、「遊び込むための環境について」のテーマのもと、子どもが「また、続きをしたい」と思える環境があったことや、作った物が置いてある場所があったことで、遊び込む経過が分かるとの意見があった。

この点について、西川先生は、４歳児のウレタン積木の温泉ごっこが片付けの時間に差しかかった場面での保育者と子どものやり取りに注目している。保育者の「この部屋で給食を食べよう」という思いと、子どもの「もっと、続きがしたい、続きをするには、このまま残しておきたい」という思いの相違があった。しかし、保育者には、子どもの「片付けたくない」という思いも分かり、保育者自身が葛藤する場面でもあった。子どもが自分の意見を言い、その意見に向き合い、子どもと保育者が、お互いがどうすればよいか考えあえる関係構築について「OECD Future of Education and Skills 2030 project（教育とスキルの未来2030プロジェクト）」の「Student Agency for 2030」を引用し、助言があった。

また、第２ブロック・中部(以下第２という)では、公開保育参加者のアンケートや討議で重複した意見が出されていた、子どもの「遊んでみたい」という気持ちを引き出す素材や道具等をはじめとする環境設定や遊びの展開について振り返りたい。ここで上村先生は、「豊かな環境であった」と総評し、続けて、「環境構成の鍵は、子どもが改良できる余地を残しておく。子どもが、『何かやってみようかな』とその日の遊びや翌日の遊びに楽しみを残す余地を残しておくと、自分で遊びの物語（ストーリー）を紡いでいく。環境の中で、子ども自身が主人公になっていく。自分の中で『〇〇がしたい』と自らの意思をもった主体として育っていく」と助言。参観中、幾度となく、保育者から考えると、この素材で、子どもがイメージしている物ができるのだろうかという場面や、作った物で遊んでいたその遊びから、発展してそんな風にイメージし、作り上げるのかという場面があった。

そして、第３ブロック・南部(以下第３という)では、富田先生自身が公開保育実施園の保育者に寄り添った質問を投げかけ、研究の着眼点である「子どもと環境に視点を置き遊びの展開を読み解く」保育者自身の在り方が問われる討議であった。４歳児の映画館ごっこにおける本物の世界をイメージした表現の実現場面や５歳児海賊ごっこで熱中し興奮した場面での保育者のかかわりや見極めや葛藤を出しあった。

子どもの主体性を育む環境を設定し、子どもの遊びが主体的に展開されていく過程を保育者も共に主体者としてかかわり、子ども同士の遊びが広がり展開していく。そこに、遊びを楽しむ子どもたちの生き生きとした姿があり、その姿がクラス集団へ波動を起こし、つながっていくことが、三園の公開保育（研究）・実践検討会から明らかである。

2 「すこやか・つながり・まなびのめばえの視点で
保育者の子どもへのかかわりを考える」

「すこやか」	安全で、安心した環境のもと、しなやかな心と体を育てます。
	生活や遊びを通し、思う存分体を動かし、様々な経験を重ね、自立心と自律性を育みます。
	興味・関心を広げ、試したり、繰り返したりし、体を動かすことを楽しみます。
「つながり」	人から愛され、自分を大事にし、互いに認めあう心を育てます。
	友だちと一緒に遊び、いろいろな気持ちを共有し、人とかかわることの心地よさを味わいます。
	自分の思いを表現し、友だちの思いを知り、調整することで、周りの人との関係性を築いていく心を育てます。
「まなびのめばえ」	夢中になって遊び、達成感や充実感、自分を表現する喜びを味わう中で、思考力や想像力、探究心を育てます。
	様々なことに関心をもち、遊びを楽しむことで、好奇心や探究心、学びへの基盤を育てます。
	遊びを通して、やりたいと思ったことをやりきったり、自分で考えたことを試してみたりし、面白さや楽しさを味わいます。

「四日市市就学前教育・保育カリキュラムより」

第１の保育カンファレンスの意見に、「４歳児のウレタン積木のシーソーの場面で、一人や二人で乗れていたシーソーに三人になるとなかなか乗れず困っていたが、保育者は『どうしたら乗れるだろうね、考えてみよう』と子どもたち自身にゆだね考えることを促していた。体験することが、まなびのめばえであると感じた」とあった。西川先生は実践検討会で、「子どもの遊びのプロセスを大事にできていますか」と問いかけた。

第２の公開保育の各クラスのねらいに「友だちと一緒に」「友だちと考えを出しあって」「友だちと思いや気持ちを伝えあいながら」とあった。これらのねらいと保育について、上村先生が丁寧に評している。（Ｐ３４）ここで、詳細は省くが「伝えあいができる関係づくりが、友だちとの間、保育者との間でできているか」ということと、「つながり」の視点への示唆があった。

第３で、富田先生は「子ども時代の『あー楽しかった』という時間がある。」と指摘された。この時間を作り上げる子どもの育ちに、「すこやか」が土台になっていくことが考えられる姿があるのではないだろうか。そこには、参加者のアンケート回答にあった「子どもたちが様々な立場、視点から、自ら選択、決定し、遊びに参加できる状況づくり」や「保育者が自分でしてしまうのではなく、子どもに声をかけ、子どもが自分でやりきる、達成感を味わえる支援」が必要である。それはつまり「安全で、安心した環境のもとでしなやかな心と体」は育っていくのだと言える。

3 「幼児期の終わりまでに育ってほしい１０の姿から
子どもの遊びを考える」

第１で西川先生は、「遊び込んでいく中に、１０の姿を発揮していく」「子どもと保育者がパートナーとして、保育をつくっていく」と教育モデルについて言及され、今一度、自身の保育の見直しや展望を考える場となった。

第２で上村先生は、「遊び」や「１０の姿」がツールになっていないかと問いかけ、物差しやゴールではなく方向目標であることを確認し、一人ひとりの保育者の振り返りの場となった。

第３で富田先生は、「幼児教育は区切りを先に見越しながら展開していくもので、区切りで学びを一律に経験させるものではない」と明言された。就学前教育・保育の学びは区切りがなく、プロセスの中に、様々なきっかけや展開が潜んでおり、子どもの幸せを考えた保育について投げかけ、保育者のかかわりを考える場となった。

また今回、関係機関・校からの職員の参加があり、「幼児期の終わりまでに育ってほしい１０の姿」についてのアンケート回答や実践検討会において「主体的・対話的で深い学び」、「個別最適な学び」、「協働的な学び」に向けた資質・能力の芽生えを培っていることを、参観から読み取れたという意見が多く寄せられた。また、その芽生えを更に伸ばしていくべく、幼児教育・保育の成果を活かした教育活動に取り組んでいこうとする意見もあった。

「幼稚園・保育所・認定こども園(以下、「幼児教育施設」という。)といった施設類型を問わず、また、家庭や地域の状況にかかわらず、全ての子供が格差なく質の高い学びへと接続できるよう、幼児期の教育から小学校教育への教育の充実を図ることが必要となる。とりわけ、教育基本法において『生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なもの』として規定される幼児期の教育と小学校以降の教育とを円滑につないでいくためには、子供の成長を中心に据え、関係者の立場を越えた連携により、発達の段階を踏まえた教育の連続性・一貫性の基に、接続期の教育の充実に取り組むことが必要である。」(中央教育審議会 初等中等教育分科会幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会より)とあるように、本研究の中で、学びの連続性の必要性を確認しあえたことと思う。

Ⅵ　課題と展望

１ブロック別の公開保育

実践研修「公開保育(研究)・実践検討会」は、四日市市の就学前施設が保育を公開しあい、同じ専門性をもつ保育者として意見を交わすことや、小学校・中学校教育関係者の参加のもと、就学前教育・保育の学びを小学校以降の学びにつなげていくための意見交流の場としていくことを展望している。

今年度、公開保育実施園と共に、研究が進められるよう当センターアドバイザーが訪問を繰り返した。公開保育実施園にとっては、当センター開設後の初の実践研修で、様々な協力を得、実施することができた。施設の種別を超えた参加者、学校関係者の参加があり、多様な意見を交流することができた。

今後は、公開当日までの訪問における支援や研修の方法、研究の視点などを検討し、子どもの育ちにかかわる保育者、学校関係者のつながりの場となるよう考えていきたい。

また、小学校との接続においては、連携の手がかりを明らかにし、「幼児期に培った資質・能力は、生涯にわたり重要なものであり、それを小学校において更に伸ばしていくことが必要である。一方、幼児教育と小学校教育においては、教育課程の構成原理など様々な違いを有することから、とりわけ義務教育の開始前後の５歳児から小学校１年生の２年間の『架け橋期』は、幼保小が意識的に協働して子供の発達や学びをつなぐことにより、生涯にわたる学びや生活の基盤をつくることが重要である。幼保小においては、架け橋期の円滑な接続をより一層意識し、乳幼児期の子供それぞれの特性など発達の段階を踏まえ、一人一人の多様性や０歳から１８歳の学びの連続性に配慮しつつ、教育内容や指導方法を工夫することが重要である。」(中央教育審議会 初等中等教育分科会幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会より)とあるように、本実践研修及び研究が、今後も各施設・学校における学びの連続性にかかわり、認識を共有し、実践に活かせるよう図っていきたい。

研究助言者

岐阜聖徳学園大学教育学部教授	西川　正晃氏
桜花学園大学保育学部教授	上村　晶氏
三重大学教育学部教授	富田　昌平氏

令和５年度

四日市市幼児教育センター研究紀要　　第1集

遊びが子どもたちの未来をつくる

令和６年５月発行

四日市市幼児教育センター

〒510-0025　四日市市東新町26－32

ＴＥＬ　059－333-6002　　ＦＡＸ　059－333-6003

四日市市幼児教育センター